

津久井やまゆり園利用者家族聞き取り調査報告

矢嶋里絵・鈴木静・金川めぐみ

1 はじめに一調査の目的と概要 (金川)

(1) 調査目的

①調査目的

この調査の目的は、利用者家族の目からみた、津久井やまゆり園における事件前後における状況を把握することである。具体的には、聞き取り調査を通じ、事件前後における施設ケアの水準や職員の労働状況、事件の加害者である被告人男性の働き方、事件後における利用者および家族の状況と施設再建における考え方、さらには聞き取り調査当時における利用者家族が考える今後のあり方を確認することにある。

②「津久井やまゆり園殺傷事件」の概要

この津久井やまゆり園の利用者家族に聞き取り調査を行った契機は、いうまでもなく2016年に起こった「津久井やまゆり園殺傷事件¹」にある。本事件は、同年7月26日の午前2時頃、県立の指定管理施設である障害者支援施設「津久井やまゆり園」に、刃物を持った加害男性（当時26歳）が侵入した事件である。入所者43名、職員3名が被害にあった。結果、19名（男性9名、女性10名）が死亡、27名（男性22名、女性5名）が負傷した事件である。

当日、園には入所者157名がおり、加害者は、園の元職員であった。死者19名を出した大量殺人事件であること、本事件が障害者の福祉施設という最も利用者の人権が擁護される場所にて起きたこと、さらにその加害者が施設の元職員であったことから、福祉関係者のみならず社会全体に大きな衝撃を与えた事件である。

③本調査グループの問題関心

私たち調査グループ²も、この津久井やまゆり園殺傷事件に大きな衝撃を受けた。と同時に、この事件における“特異性”と“普遍性”を巡っての議論にも着目した。周知の通りその後、本事件はマスコミ等でも注目され大きく取り上げられることとなった。特に注目されたのは、事件前に加害男性が衆議院議長宛てに渡した手紙である。そこには彼が起こす大量殺人の予告や、極端な優生思想的考え方が記されていた。この点のみ着目すると、事件は極端な思想を持つ加害者がたまたま起こした“特異”なもの、と捉えられるかもしれない。

¹ この事件の名称であるが、本事件を扱った一連の文献においても「やまゆり園障害者殺傷事件」「相模原障害者施設殺傷事件」「相模原障害者殺傷事件」など、必ずしも名称が統一されている訳ではない。本調査報告では「津久井やまゆり園殺傷事件」という名称を用いることとする。

² 調査グループのメンバーは下記の5名である。矢嶋里絵（代表：首都大学東京）、井上英夫（佛教大学）、金川めぐみ（和歌山大学）、木下秀雄（龍谷大学）、鈴木静（愛媛大学）（敬称略、代表者以外は50音順）。

だが、この聞き取り調査の利用者家族の1人から聞かれたように、施設関係者や家族、障害のある当事者からは「こんな事件がいつか起きるかもしれないと思っていた」との声もあった。この発言の背景には、障害のある人への差別意識や偏見の問題、施設処遇の問題や福祉労働者の処遇の問題、ひいては障害者福祉や社会保障制度そのものの有する構造の問題等が複合的に交錯し、事件が“必然的”に起きたとの認識がある。この意味で、本事件は現在の障害のある人をめぐる福祉の状況を再考させる“普遍性”の意味を持つとも捉えられる。

私たち調査グループは、この事件を後者の立場で捉える。それ故に、本事件から引き出される問題の“普遍性”に着目し、そこから引き出せる障害者福祉・ひいては社会保障制度の構造そのものに目を向け、検討を深めていきたいと考えた。このような問題意識を背景に、関係者への聞き取り調査を実施することにした。

なお本事件の関係者には、利用者本人、利用者家族、施設関係者、行政関係者、被告人男性等の多様なアクターが存在する。しかしながら今回の調査報告では、利用者家族へのインタビューを通じ、その概要を明らかにすることとする。その他のアクターについての聞き取りも一部実施しているが、これらの公表については後日としたい。

(2) 調査方法・対象者・調査日時

①調査方法

今回の調査は、質的調査の手法をとる。具体的には、津久井やまゆり園の利用者家族のうち2家族に対し、半構造化されたインタビュー手法によるデータ収集を行った。なおインタビュー内容のトランスクリプトは、参考資料の通りである。

考察では、トランスクリプトを整理し分析する。後述の鈴木論考では、津久井やまゆり園におけるケア水準と福祉労働に着目した分析、矢嶋論考では、利用者家族の目から見た再生基本構想³と地域移行に着目した分析を行う。

②対象者と調査日時

津久井やまゆり園の利用者家族のうち1家族目は、尾野剛志・チキ子夫妻である。特に尾野剛志さんは、津久井やまゆり園で17年にわたり家族会会長を務めてこられた経歴を有し、被告人男性とも面識がある。かつご子息が本事件の被害者であり重傷を負われたということから、マスコミ等に積極的に本事件に対する自身の思いを発信しておられる。その点を踏まえ、利用者家族の事件に対する考え方を伺うのに最適な人物であると本調査グループは判断し、インタビューを依頼・快諾を得た。

津久井やまゆり園の利用者家族のうち2家族目は、平野泰史さんである。本事件について調査を進めていく過程で、特に施設再建の考え方と地域移行の点について、家族会のメンバー全員が同じ考え方で賛同している訳ではないという点に気付いた。平野さんも、本事件に対する利用者家族としての考え方を積極的に発信しておられる方であり、かつ1家族目の尾野さんと異なる考えを有し

³ 本事件を受け、神奈川県では2016年11月に津久井やまゆり園事件検証委員会の「津久井やまゆり園事件検証報告書」が発表された。さらに2017年10月には「津久井やまゆり園再生基本構想」報告書も出されている。本稿では後者の報告書の内容を指して「再生基本構想」と呼ぶ。なおこの報告書では「利用者の意思決定支援」「安心・安全に生活できる場の確保」「地域生活移行促進」という3点から今後のやまゆり園のあり方を述べている。

ておられる。その点を踏まえ、1家族目の尾野さんの視点とはまた異なる視点から、利用者家族の状況を把握するのに最適な人物であると本調査グループは判断し、インタビューを依頼・快諾を得た。

1家族目の尾野夫妻に対する聞き取りは、2017年11月4日の14:00-15:30の間、首都大学東京南大沢キャンパスにて実施した。

2家族目の平野さんに対する聞き取りは、同年11月4日の16:00-18:30の間、同じく首都大学東京南大沢キャンパスにて実施した。

(3) 倫理的配慮

本調査は、公立大学法人首都大学東京南大沢キャンパス研究安全倫理委員会の承認を得て実施している。なお2家族には聞き取り開始時に調査趣旨を説明した上、実施に対する承諾を得ている。

また両家族に対して、当日のインタビュー内容の録音承諾を得た上、トランスクリプトについては後日、内容確認を頂き掲載の許可を得ている。

2 福祉施設のケア水準と福祉労働に着目して (鈴木)

(1) 利用者家族に共通する特徴

今回の聞き取りでは、利用者家族のうち2家族にお話をいただいた。そのうち尾野さん夫婦にいたっては、息子の一矢さんが事件で重傷を負った経験をもつ。

両家族からの聞き取りについて、再発防止の観点から、被告人男性の働き方、津久井やまゆり園のケア水準に着目して、その特徴と若干の考察、そして私たちの研究課題を述べる。

共通する特徴は、津久井やまゆり園を神奈川県内の他施設と比較して、ケアの質が良いと評価していることにある。尾野さんは17年間にわたり家族会会長を務めてきたことをふまえ、「津久井やまゆり園は最高の施設だよ。ずっと会長やっているところから、今もそうですけど、ずっとそういう施設だと思って見てきました」という。具体的には、同施設のよさとして「職員の若さ」をあげ、「(福祉系の)大学出た後に、専門職の人たち」は「障害を持った人たちに対する向き合い方が良い」と高く評価する。平野さんは「僕の印象では、職員の質としては、施設の中では良い方だと思います。非常に対応もいいし、実際うちの子が入ってから、2年間でかなり良くなった」と肯定的に評価する。

津久井やまゆり園は、家族からケアの質が良いと評価されている点は、重要であると考える。

(2) 被告人男性の働き方

被告人男性に面識があるのは、尾野さんのみである。事件前の被告人男性を「好青年」と評価する。「普通の子だし、すごく穏やかだし、それがどこでどうなったのかがね、わからないです」といい、被告人男性が刺青を入れていることが発覚した事件と津久井やまゆり園執行部の対応にふれ、この前後で「彼の心に、やっぱりどっかそこでおかしくなったのだらうと思いますね」と推測している。普段の働き方についても、尾野さんは肯定的に評価している。勤務外の時間でも施設内で働いており、「『会長ご苦勞様です』って言うてくれる。本当になんか、普通の子なんですよ」と、振り返る。

利用者家族からの聞き取りだけで断言できないが、「普通の子」である被告人男性の働き方の一端がみえる。なお、被告人男性は家族会会長である尾野さんに挨拶をしているが、その際に利用者である一矢さんの父親であることも認識していたことも、別の機会の聞き取りから確認している。

被告人男性は、事件前に「好青年」と評価される言動をとり、家族会の会長であり、利用者の父親である尾野さんを認識していた。被告人男性が障害のある人とその家族関係を、実際に見て知っ

ていたことは、この事件を考えるうえで重要である。なぜなら、被告人男性は、自身の定義で意思疎通できない人間を「心失者」と呼び、意思疎通とは、自身で正確に、名前、住所、年齢を言えることだとする。そうした「心失者」は家族にとっても迷惑で、安楽死すべきだと主張している⁴。私たち調査グループは、2018年8月21日に、立川拘置所で被告人男性と面談をしており、その際にも現在も考え方は変わっていないことを聞いている。

家族が無理心中している現実ってやばいことでしょう。私の小中学校の同級生で一人、いつも意味なく走り回っている人がいましたが、そのお母さんの笑顔を思い出せません。顔見ればわかりますよ。それでも家族として幸せだという人もいますが、そう言わなければ自分を否定することになるのでそう言っているだけだと思います⁵。

一方で、福祉施設職員であった被告人男性は、勤務中に津久井やまゆり園に来る家族と、どの程度の会話、対話があったのかは不明である。少なくとも、家族会会長の尾野さんとは挨拶程度であり、保護者がどう考えているか知る機会は乏しかったことが推測される。現在のところ、被告人男性固有の問題なのか、津久井やまゆり園職員の問題なのか、全国の社会福祉施設職員の問題なのかは明らかではない。被告人男性のこの発言と、津久井やまゆり園での働き方、利用者家族との関係がどうであり、被告人男性がどう認識していたのかを解明することは、再発防止の観点から非常に重要であり、今後の研究課題としたい。

(3) 日中活動、外出支援と人手不足

平野さんは、津久井やまゆり園の「職員の質は、施設の中では良い方だと思います」と評価しながら、「恒常的に人手が足りない」と考えている。具体的に、日中活動と外出支援を例にしながら説明した。津久井やまゆり園では、日中活動は平日の午前午後に行うことになっていると施設から説明を受けたが、平野さんは「実は毎日行っていない」ことを知る。その理由は「職員が少ないので、(略) その日ごとに参加する人を選んで、行けるとしても週に2日か3日、しかも午前か午後のみしか行けない」ためであり、平野さんは「だからほとんど日中も、ホーム、自分たちの生活の部屋にいて、そこにいる職員が適当に相手をしている、というぐらいのことですね」と推測している。

その後、平野さんの津久井やまゆり園への働きかけにより、平日の日中活動の機会は増えたと職員から説明を受けるが、平野さんは実際にどの程度実施されていたのか懐疑的な見解を示している。その理由は、人手が足りないことにありと考えており、津久井やまゆり園の職員を募集しても、希望者が集まりにくいのではないかと分析している。職員が集まりにくい理由は、津久井やまゆり園の立地を挙げる。具体的に、「ものすごい山の中」、「谷間で、冬にはもう5時になると完全に真っ暗。サルは居るわ、イノシシは居るわ、(略) バスも1時間に1本あるかないか、相模湖駅から、橋本駅まで直通で行かないんですよ。津久井湖の手前のバスのステーション(略)から乗り換えていかなくちゃいけないんで、非常に不便なところ」という。

津久井やまゆり園は1964年に開設されている。1970年前後に、国公立でコロニーと呼ばれた大規模入所施設が続々と設立された。コロニーとは、「障害の重い人が長期間居住し、そこで社会生活を

⁴ 「獄中の植松聖被告から届いた手紙」創9月号2017年31頁

⁵ 「植松聖被告の近況と『開けられたパンドラの箱』の反響」創2018年10月号63頁。筆者らの接見に同席した篠田博之氏がやり取りを要約、意識して掲載している。

営む生活共同体であり、また各種の機能を備えた諸施設が有機的に連携した総合施設」(厚生大臣諮問機関「コロニー懇談会」1965年9月)⁶である。津久井やまゆり園はコロニーではないが、こうした時期に開設され、実際に郊外に建設されている。そのため、現在でも公共交通機関を利用しても、便利であるとはいいがたい。

平野さんは、外出支援については「ただし、土日なんかはほかの多くの施設と同じようにどこにも行けませんし、行っても、せいぜいドライブぐらいですね。ほかに年1回遠足というのがあって、日帰りでバスで出かけるのと、それから、あそこは年1回職員が1泊旅行に連れて行ってくれる。(略)ほかにやまゆり園独自のヘルパー制度っていうのがありまして、半分職員のボランティアみたいなことなんですが、職員に時間があって行ければ食事などに連れて行ってくれる」状況等であったと話した。外出が乏しいと考えた平野さんは、「うちの子は外に出るのが好きなので、土曜か日曜毎週必ず連れ出しに行っていました」と話した。

さらに、津久井やまゆり園以外で聞いたという、職員の「良き羊飼いになるのが一番いいんだ」の発言を紹介した。現状の職員配置では、障害のある「利用者は行きたいところにも行けないし、おいしいものも食べられない。毎日同じもの、みんなで食べさせられて。毎日3時ですよ、風呂入るの。パジャマを着替えさせられて、どこにも行けない。好きでもないテレビを見てるだけ……。実際20人で、職員は3人くらいですね、極端に言えば、見ているだけですよ。できないですもん、だってひとりの人に関わってられない。なんとか見てる、悪く言えば監視員ですよ。職員の方は、いろいろやりたいと思っていても、できないですよ。3対20でやりたいことをやらせてやろうと思ってもできないと思います。」という。

平野さんの指摘は、非常に重要であると思われる。一方、事件後1年程たった被告人男性は、次のように発言している(*以下は、篠田博之氏による質問である)。

* 障害者施設の職員の仕事は大変だと思うのだけど、それは理解していたわけなの？

被告人男性：大変と捉えるかどうかは人によって違うと思いますが、私はそう思ったことはありません。むしろ楽な仕事だと思っています。

* 津久井やまゆり園の労働条件や待遇に不満があったわけではない？

被告人男性：全くありません。むしろ障害者施設の中では働きやすいところだったと思います。例えば「見守り」という仕事があるのですが、本当に見ているだけですから。

* でもいうことを聞いてくれない障害者もいたわけでしょう。

被告人男性：もちろんいました。でも暴れたときに押さえつけるだけですから。

* じゃあ君はそういう仕事自体に疑問を感じたわけではないわけね。

被告人男性：はい、そういうことは全くありません。ただ彼らを見ているうちに、生きている意味があるのかと思うようになったのです。それは現実を見ていればわかることだと思います⁷。

被告人男性は、津久井やまゆり園は「楽な仕事」だと答え、「『見守り』という仕事があるのですが、本当に見ているだけですから」と言い、「暴れた時に押さえつけるだけ」と認識していた。本来、「見

⁶ 荒芝康夫「大阪府障害者福祉事業団・金剛コロニーの施設改革と課題」障害者問題研究第32巻第1号2002年30頁

⁷ 「獄中の植松聖被告から届いた手紙」創9月号2017年31頁。なお、本稿では文中の被告人男性の名前が記載されている部分を、「被告人男性」に変更している。

守り」は利用者の意思やペース、自主性を尊重し、自傷他害を防ぐ目的に行われるもので、高度な専門性を求められる。しかし、被告人男性は「ただ見ているだけ」にすぎなかった。専門性のかけらもない働き方がみてとれる。被告人男性が、曲がりなりにも仕事できていた津久井やまゆり園のケアには、問題があったと言わざるをえない。さらに重要なことは、被告人男性がこうした働き方から「ただ彼らを見ているうちに、生きている意味があるのかと思うようになったのです。それは現実を見ていればわかることだと思います」と、働くなかで彼の考え方が作られていったことを話していることである。働くなかで、「心失者」は生きる価値がないと考えるに至ったのは、人手不足のなかで、専門性のかけらもない働き方のなかで作られていった点を強調しても強調しすぎることはない。

ここで津久井やまゆり園の職員配置を確認する。津久井やまゆり園によれば、事件前の2016年度には、160人の利用者数に対して、職員数は全体で165名であり、常勤は115名、臨時任用は11名、非常勤は39名である⁸。また、利用者のケアに当たる生活課の働き方は、利用者定員20名に対し、支援員の配置は12名(うち1名寮長)である⁹。職員の労働時間は週38.7時間(変形労働時間制)である。職員配置の最低基準は、障害者総合支援法で定められており、津久井やまゆり園の職員配置は基準を十分に満たしている。このことは個別施設の人手不足の問題ではなく、障害者総合支援法の職員配置基準の設定自体の問題であると考えられる。

繰り返すと、平野さんのいう「恒常的に人手が足りない」状況は、ほかの社会福祉施設も同様であると私たち調査グループは考えている。また、障害者総合支援法における職員配置基準そのものを、根本から考え直さねばならないと考える。今後、ケア保障の観点から、実態を踏まえ配置基準のあり方につき、法的課題として取り組んでいきたい。

(4) 指定管理制度導入とケアの質

津久井やまゆり園は、1964年に神奈川県立施設として開設され、2002年に指定管理者として社会福祉法人かながわ共同会が運営を開始した。尾野さんに、指定管理制度導入についての経緯を聞いた。神奈川県で指定管理制度導入の「第一号」として、津久井やまゆり園に「白羽の矢」がたてられ、家族会会長である尾野さんは、県の検討委員会に家族代表を入れることを提案し、実現したことや、かながわ共同会が手を挙げたことから同法人が運営する他施設を見学してきたことを挙げた。『『これなら県立施設と何も変わらないや』と安心しました。家族みんなで署名をして、指定管理はかながわ共同会にしてくださいって嘆願書も出しました』と積極的な行動を振り返った。

平野さんは、指定管理制度導入時期を直接は知らない。しかし「居た方に聞くと」、指定管理導入前は「職員の質は非常に悪かったということですね」と言い、「共同会が指定管理を受けてからはだいぶ職員の質はよくなった、ということです」と話した。

両家族は、指定管理者としてのかながわ共同会運営の職員の質を高く評価している。しかし、元神奈川県職員である松尾(2019年)によれば、「かながわ共同会は県立社会福祉施設の運営を受託す

⁸ 社会福祉法人かながわ共同会「津久井やまゆり園の概要について」2017年12月11日(筆者ら訪問時の説明資料、日本社会保障法学会第73回大会ミニシンポジウム「障害のある人の人権と家族・にない手の人権—津久井やまゆり園殺傷事件を契機に—資料集」86～87頁)

⁹ 津久井やまゆり園作成「津久井やまゆり園生活課の勤務時間(平成28年度まで)」日本社会保障法学会第73回大会ミニシンポジウム「障害のある人の人権と家族・にない手の人権—津久井やまゆり園殺傷事件を契機に—資料集」166頁

るために設立されていた法人です。その主目的は経費節減であり、そのターゲットは人件費です」とし、情報公開制度を使って、指定管理以降の状況を調べ、批判的に分析する。具体的には、「職員数の推移を調べたところ、削減された予算で職員数を維持するために、非常勤職員の割合が増えていました。また職員数を必要部署に重点配置するため、日中活動や地域サービスへのシフトが起こり、生活ホーム担当は減っていました」¹⁰と批判する。

指定管理制度導入と非常勤職員割合の増加、ケアの質との関係については、私たち調査グループも、施設運営の現状を明らかにし、これらを法的課題として検討していきたい。

(5) 津久井やまゆり園利用者の障害支援区分

平野さんは、「やまゆり園の中に、重度の方が多いと考えていらっしゃる方もいるかと思いますが、本当に重度の方はいないと思います。最重度の方が、4人か5人くらいじゃないかと思いますが」と話した。具体的に「ぼくが知っている限りでは、胃ろうの方が一人、医療が必要な方が一人いますけど。本当、最重度のかたは、4名って言ってましたね」という。その理由を、津久井やまゆり園は最重度の人を入所させていなかったからであり、障害者総合支援法に基づき、障害サービス等報酬である「お金は取れますけど、大変で人手がかかっちゃうから。最重度と言っても、手のかからない人だと思います」と推測する。一方で慎重に「やまゆり園では実際、本当にはよく知らないですよ。ぼくだってその子と一緒に暮らしたわけじゃないし。ただ、みてる限り、みんな穏やかですよ。本当すぐにでも、外にだしてあげられそうな方ばかり」とも話した。さらに、津久井やまゆり園は「そういう最重度の子をみるようなスキルはないですよ」と考えている。

津久井やまゆり園資料によれば、2017年4月1日時点での障害支援区分別人数と割合は、合計101人(100%)のうち、もっとも障害が重い障害支援区分6が85人(84.2%)である。また同年同月時点の障害程度別人数と割合は、最重度68人(67.3%)である¹¹。障害支援区分は6段階まででなく、それゆえ非常に広い障害程度を含む。

障害支援区分は必ずしもケアの必要性と一致するわけではなく、個別性も大きい。最重度の利用者がどの程度いるかどうかは、一利用者家族である平野さんの目から正確なところはわからないことはやむを得ない。今回の事件から、問われなければならないのは、社会福祉施設のケア水準や専門的スキルの検証である。これは職員配置とそれを担保する障害サービス等報酬、さらには神奈川県が実施している指定管理制度の具体的内容も含めて検討されなければならない。

(6) 津久井やまゆり園殺傷事件はどこにでも起こりうるのではないか

平野さんは、津久井やまゆり園殺傷事件の第一報を聞き、「びっくりしたのはびっくりしましたが、そんなに不思議な気はしなかったんですよ。やっぱり、そういうことが起きたなって感じはしましたよね。」と話す。そう思った根拠について、津久井やまゆり園入所以前に利用していた施設で、息子が虐待を受けていたことをあげ、さらに「前の施設でも結構あったんですよ。そういうのを見たりしていましたし」と説明した。この事実を、平野さんは次のように分析する。「虐待自体は、起きてもちっとも不思議じゃない」、「特に大規模な施設っていうのは、必ず起きる条件はそろってま

¹⁰ 松尾悦行「津久井やまゆり園再考」ふくしの広場 591号 2019年 32頁

¹¹ 社会福祉法人かながわ共同会「津久井やまゆり園の概要について」2017年12月11日(筆者ら訪問時の説明資料、日本社会保障法学会第73回大会ミニシンポジウム「障害のある人の人権と家族・にない手の人権—津久井やまゆり園殺傷事件を契機に一資料集」86～87頁)

すからね。管理された状態で、行き場のなくなった職員がそういうことをする。閉鎖された中ですから、そういうこと（＝虐待）はなんか、あたり前になっていく。だんだんそういうこと、別に普通のことだと思って、下の人間もそれを、そういうのを見えていますから、あたり前のことだと思っちゃう。上から言われれば、有名な囚人実験じゃないですけども、管理者がいて、それに従って、そういうことがどんどんエスカレートしていくのはあり得ることだと思います」。

注目すべき点は、津久井やまゆり園以外でも起きうると認識し、それが我が子の虐待の事実と、虐待が起こり得る構造を大規模施設に見ている点である。今後、平野さんの問題提起を受け、筆者らは実態を踏まえ法的問題として検討していきたい。

3 再生基本構想に関して（矢嶋）

（1）対象者のプロフィールと整理の視点

尾野剛志さん

息子の一矢さん（事件当時 43 歳）は県内児童施設を退所後、1996 年から事件当時まで約 20 年間津久井やまゆり園に入所していた。事件で重傷を負い 44 日間入院した。現在は芹が谷園舎で生活している。父である尾野剛志さんは、2016 年 3 月まで 17 年間、やまゆり園の家族会であるみどり会の会長をつとめた。

平野泰史さん

息子の和己さん（事件当時 26 歳）は、10 歳から 14 年間、県内障害児施設で生活した後、2014 年から事件当時まで約 2 年間津久井やまゆり園に入所していた。幸い事件の被害を免れた。2018 年 5 月から地域生活をしている。泰史さんは、みどり会の役員をつとめていた。

2017 年 10 月、神奈川県は「津久井やまゆり園再生基本構想」（以下、「構想」という）をまとめた。本構想における基本的考え方は、①利用者の意思決定支援、②利用者が安心して安全に生活できる場の確保、③利用者の地域生活移行の促進である。以下、この 3 点について聞き取り調査結果を整理してみよう。

（2）利用者の意思決定支援について

構想は、

今後の生活の場の選択については、津久井やまゆり園利用者一人ひとりの意思を尊重すべきであり、その実現に向け、丁寧に、かつ、適切な手続きにより、利用者の意思決定支援に取り組む。（2 頁）

と述べている。

尾野さん、平野さんともに、人はすべて障害の程度にかかわらず意思はあるとしている。

尾野さん：僕は、どんな子どもでも、どんな障害を持っていたとしても、意思があると思うんですけど、自分の気持ちをね、ほかの人に伝えられるかどうかだと思います。

平野さん：どんな人でも、意思はあるんですね。脳のない子、小脳しか機能しない子がいて、そういう子でも、意思があるっていうんですね。それは何が意思かっていうと、生きてるってことが意思だ。

生きようとしてることが、呼吸をするということが意思なわけで、誰にでもあるわけです。

ただ、尾野さんは、意思決定支援よりも先に受け皿の整備が必要であること、

尾野さん：（意思決定支援は、意思の先）に物（グループホーム）がなきゃできないでしょって逆に。なんで受け皿がなければいけないし、受け皿があった上で、やるべきでしょって言うのが僕の考え方です。

また、意思決定支援を「どのように」「誰が」「どの程度時間をかけて」行うのかを明らかにすべきであると指摘している。

尾野さん：何年もずっと一緒に暮らしたり、支援していけばね、5年も10年も知っていけば、理解は出来るかもしれない。でも、たった半年か、1年2年で、それも、専門の職員が何人かと、誰が何人かだけで、2年間かけて意思確認を、意思決定をするって言ってるんですね。僕は間違ってるなと思っています。

尾野さん：それとどのぐらいの時間をかけてやるのか。軽度の人達で、自分で言葉が言える、ある程度分かる人達で判断できる人達は、それは意思確認も、意思決定もできるでしょうけど。うちの子どもも、片言で話すことは出来るけど、じゃあ、何も言わないのに。「一矢、どこで住みたい？お父さん家住みたい？園で住みたい？」って言っても、「やめとく、やめとく芹が谷にしたの。」とだけですからね。…本人がどう思っていると思ってるのかって聞くには、何年もかかると思うんですよ。

そして意思決定支援を進める上で、施設入所期間が長期に及び、入所以来一度も施設以外に行っていない人が多いこと、障害者・両親ともに高齢化¹²していること等から、理解を得るのが難しいのではないかと述べている。

尾野さん：それと、今、芹が谷に居る人たちは、130人、または120人は、県立施設でずっと、入所してきた人達です。一番長い人で45年、施設に居るわけですよ。もう70歳近いんですよ、今いる人達の中で。一度もよそ行ってないんですよ。行ったことない。そういう人たちの、お母さん・お父さんはね、80代90代ですよ、皆さん。その人たちに、どうやって、このことを説明して、理解してもらうのですか。本人も70歳になるおじいちゃんに、普通ならおじいちゃんだよね、65歳になるおじいちゃんに、それを喋ることも出来ない、何も出来ないおじいちゃんに、どうやって「あんたどこ行きたいか」って聞くのか。

僕は、部会の人達にも、それを言ったんですけどね。津久井やまゆり園、芹が谷園舎に来て、利用者さんと一度でも会った事あるんですかって。ちゃんと会って、言ってる話ですかと聞いた。意思確認できるような子どもたちは、出来るかもしれないけど、何年もかかるんですよ。こんな3ヶ月5ヶ月で意思確認できますか。2年で意思確認しますって言ってるけど、実際に出来るような子ども達、誰

¹² 津久井やまゆり園利用者の平均年齢は49歳2ヶ月、平均在所年数15年2月である。（社会福祉法人かながわ共同会「津久井やまゆり園の概要について」2017年12月11日。筆者ら訪問時の説明資料、日本社会保障法学会第73回大会ミニシンポジウム「障害のある人の人権と家族・にない手の人権—津久井やまゆり園殺傷事件を契機に一資料集」85頁）

もないですよ。ということを僕は言ってるんですけど。

平野さんは、意思決定支援を進めるにあたり、障害者本人の体験の積み重ねと、本人だけでなく家族に対する丁寧な説明と情報提供が必要であるとしている（一以下は、調査者による発言である）。

一逆に言うと、地域移行って言われても、受け止める力は、多くの家族にはもうない…

平野さん：いや。それを家族に求めたら、まず上手くいかないですね。やっぱりそういう事は、(家族に)一切負担をかけないと知事も言いましたが、それは家族が不安になっちゃうので。そのことは、県にだいたい要望はしてますけどね。大勢いるところで家族に話をしても通じないんですよ。だから、意思決定確認をする段階で、家族にも丁寧に説明するという方法が一番いいんじゃないかと思います。

一選択肢をよっぽど丁寧に提供しない限り、難しい。あなたどこ住みたいですかの質問自体、あまり意味がないということを言いたかったんですけどね。

平野さん：うん。やりようはあるし、やってみなきゃわからない部分もあるので、例えばそういう体験をさせるとか、そういう事をやりながら、すぐにその場合決めるんじゃなくて、ゆっくり決めていくという方法でいいと思うんです。そういう方法を持って少しずつ進めていけば、何かしらの結果は出るし、家族に関しても丁寧に情報を与えていけば、それではちょっとやってみようかという方もかなり出てくると思うんです。例えば、北海道の「はるにれ」もそうだし。そういう事やってきて実証済みなので、かなり進んでいくと思いますよ。

このように、平野さんが、家族に対する情報提供や説明の大切さを強調している点は注目に値する。たしかに構想は、「地域生活への移行は、・・・家庭への復帰を前提とするものでもない。」(2頁)としている。しかし、情報や説明が不十分なままでは、家族は地域移行＝家庭復帰＝家族負担と受け止め、不安を抱き、この不安こそ障害者の地域移行を阻む要因となるおそれがある。

わが国において障害者家族がこうした認識をもつのは、依然として根強い家族同居を「福祉における含み資産」¹³とみなす考え方や、障害者ケア施策の社会化の遅れ¹⁴が深く影響していると考えられる。

(3) 利用者が安心して安全に生活できる場の確保について

当初、県は「現在地での全面的な建替え」によって安全・安心で暮らしやすい園を作ることを基本的考えとしていた¹⁵。

しかし、その後、これに対する異議が公聴会等で出されたため、見直しを迫られ、以後、県障害者施策審議会津久井やまゆり園再生基本構想策定部会(以下、「部会」という)で議論を行うことになった。

¹³ 1978年厚生白書。

¹⁴ 竹中康之「支援費の支給決定をめぐる法的課題」同志社法学54巻3号2002年。

¹⁵ 2017年1月6日「現在地での全面的な建替えによって、事件を風化させることなく、事件の凄惨なイメージを払拭し、再生のシンボルとして、利用者の人権に配慮しながら、安全・安心で暮らしやすい新しい園を創ります」(下線、筆者。神奈川県「津久井やまゆり園再生構想策定に向けた現時点での県として基本的な考え方」)

再生基本構想は、

津久井やまゆり園利用者が事件の被害者であり、大変精神的な苦痛を受けたことを踏まえ、まず、130人のすべての利用者が安心して安全に生活できる入所施設の居室数を確保することを前提とする。その上で、利用者の選択の幅を広げ、その意思を可能な限り反映できるよう複数の選択肢を用意する。

また、入所施設については、医療的ケアや強度行動障害へのケアなど専門性の高い入所支援機能に加え、短期入所や相談支援など、専門的支援力を活かして地域生活を支える拠点機能も充実強化を図る。(2頁)

とする。

「安心して安全に生活できる」という点については、尾野さんも平野さんも異論がないと思われる。問題は、その「場」はどこかである。これについて尾野さんと平野さんは意見が異なる。

まず、尾野さんは、下記のとおり現在地(=千木良)での施設再建を希望しており、それは、津久井やまゆり園に対する肯定的評価(「素晴らしい」「申し分ない」「心配ない」)に由来していると考えられる。

尾野さん：素晴らしい施設なんだから。支援の仕方だってね。全国の色んな人たちから、色んなこと言われたりしてますよね。まあ、見方によっては多少ね、この辺はちょっと違うのかなっていう支援の仕方があるかもしれないけど、家族から見れば、本当にあの申し分ない施設です。今以上に要求することは出来るかもしれませんが、それは逆に、県立でしたからね、行政に話すべきことでね、だから、園の支援について必要なことは、もうほとんどしてくれてますから、本当にあの僕ら心配ないと思ってるんですよ。

また尾野さんは、以下のとおり第7回部会(2017年5月17日)においても「津久井やまゆり園も立派な地域」であり、千木良に事件前の規模の施設を作るよう求めている。この発言は、地域か施設かという二者択一的に捉えることへの疑問であり、地域とは何か、地域における施設の役割とは何かという重要な問いかけであると私たち調査グループは受け止めた。

尾野さん：津久井やまゆり園は、定員が150名で確かに大規模施設ですが、それは地域移行という考え方の中において、施設が地域に開かれていれば「地域」なのではないのでしょうか。グループホームでなければ地域とは言わないのでしょうか。大規模施設である津久井やまゆり園も、立派な地域です。津久井やまゆり園は、先ほど会長が申したとおり、1つの家です。正直、今部会が行っている審議は1つの家、家族をバラバラにしようとしているとしか思えませんし、納得がいきません。余計なことを考える必要はありません。あの地に、最低でも事件前の規模の施設をつくってください。

ところで、鈴木¹⁶は、地域移行の取り組みに対する家族の否定的態度の要因として、①施設福祉サービスへの安心、②本人の能力の限界への不安、③親族への悪影響に関する不安、④地域福祉サービ

¹⁶ 鈴木良「知的障害者入所施設 A・B の地域移行に関する親族の態度についての一考察」社会福祉学 47 巻 1 号 2006 年。

スへの不安、⑤非民主的な意思決定プロセスへの不安をあげている。こうした要因のうち、①、②、④は、尾野さんの発言からも読み取ることができよう。

他方、平野さんは、障害者の生活の場は地域であるべきであり、千木良での施設再建には反対の立場をとる¹⁷。その理由は、以下の2点に整理できよう。

第1の理由は、生活する場として施設はふさわしくないと判断していることである。前述鈴木論考にもあるとおり、平野さんは、津久井やまゆり園のケアの質については一定の評価をしている。しかしその一方で、恒常的な人手不足ゆえに、職員はやりたいことがあってもできずに「監視員」とならざるをえず、そうした施設での生活は障害者にとって、およそ人間らしいものとはいえないとしている。

平野さん：行きたいところにも行けないし、おいしいものも食べられない、毎日同じもの、みんなで食べさせて。毎日3時ですよ、風呂入るの。パジャマに着替えさせられて、どこにも行けない。好きでもないテレビ見てるだけ…。

実際20人で、職員は3人くらいですね、極端に言えば、見てるだけですよ、出来ないですもん、だってひとりの人に関わってられない。なんかか見てる、悪く言えば監視員ですよ。職員の方は、いろいろやりたいと思っても、できないですよ。3対20でやりたいことやらせてやろうと思っても出来ないと思います。

だから、前の施設で「良き羊飼いになるのが一番いいんだ」って言ってた職員がいますよ。それが現状ですよ。利用者もそこでうろうろしてるしかないわけです。

普通の人にそんなことしたら、監禁、虐待ですよ。相当ギャップがあるわけですよ。施設も、人がいないんだから仕方がないよということなのか。どうにもならないですよ。人がいればなんとか、一人ひとり見られるかもしれないけれども、実際どうにもならない。

そして、今回の事件発生を聞いて「そんなに不思議な気はしなかったですよ。やっぱり、そういうことが起きたなって感じはしましたよね。」「今でもまた起こりうると思いますよ。そういう土壌はありますからね。」として、施設には構造的問題があるとしている。大規模施設であったことが本事件発生の一因ではないかという指摘は少なくない¹⁸。平野さんの語りからしても、本事件が、施設に共通して存在する構造的課題に起因するものか否かについて、さらに考察が必要であろう

第2の理由は、施設を肯定する障害者家族の考え方への疑問である。平野さんによれば、平野さんも含めて障害者家族は、「大変な苦勞をしてきた」という。そして、このように育児や介護で過重な負担・困難を余儀なくされてきた親が、結果として障害のある子どもを、人である前に障害者として見てしまい、障害者なのだから入所施設で「仕方がない」「ここにいる事が一番いい」と思い込んでしまうという。だが、平野さんは、そうした家族の考え方に疑問を抱いている。

¹⁷ なお、平野さんは、第7回部会において「施設は少なくしていくべき」「施設は自由度が低い」「施設の外のことや地域移行について家族に周知していけば意識が変わっていく」「津久井は出かけるにも通勤にも大変」「建替えに何十億というお金をかけるのであれば、地域生活移行に使った方が有効」「在宅の方はできれば施設に入りたいくないという方が多い」「待っている方は仕方なく待っているだけであって、グループホームなどを地域に作っていけば、施設に行きたいという方は減って行く」と発言している。

¹⁸ たとえば、河東田博『入所施設だからこそ起きてしまった相模原障害者殺傷事件』現代書館2018年。渡邊琢『障害者の傷、介助者の痛み』青土社2018年。

平野さん：それは、大変だったんでしょう、実際うちも大変だったです。大暴れして大変だったんですから。そういうこともあって、簡単に言っちゃうと、親が子どもを障害者だ、として見ちゃってるんですよね。人であるという前に。それは大きいですよ。障害者としてしか見てこなかったわけですから、今まで、それで苦労してきたわけだから、障害者だから、なんとかしなきゃいけない、障害者だから、施設に入れなきゃいけない、障害者だから、色々ヘルプしてもらわなきゃいけない、と思う。親はそう、思い込んでいますから。

極端に言えばですよ、人としては見ることができない…、だと思いますよ、多くの方は。仕方がないと思っちゃうんですよね、障害だから、何かできなくても仕方がない、外に行けなくても仕方がない、ここにずっといても、仕方がない。あるいは、逆に言えば、ここにいる事が一番いい、それ以外は考えられないってことなんですよ。

この語りから想起されるのは、以下の2点である。

まず第1に、前掲鈴木が指摘するところの家族が抱く「本人の能力の限界への不安」である。そして第2に、さまざまな困難な状況（貧困・低所得、虐待、差別、社会的孤立、家族による介護負担等）を経験してきた家族の多くが、現状を肯定するという実態である。こうした「現状肯定」の背景には、「全般的な諸制度の貧しさのなかで、別の選択肢を持てず、こうした印象を持たざるを得ない」¹⁹こと、「成人期についてのモデルストーリーが不在であること」²⁰を先行研究が指摘しているが、この点についても今後さらに検討を深めたい。

なお、津久井やまゆり園家族会（みどり会）が県知事への2017年9月12日要望書の中で、現在地での建替えを求めたとされるが、平野さんはそれが家族会の総意といえるのかは疑問であるとしている。

(4) 利用者の地域生活移行の促進について

再生基本構想は、

地域生活への移行は、あくまでも利用者本人の意思に基づくものであり、決して強いられるものではなく、また家庭への復帰を前提とするものでもない。意思決定支援を進める中で、地域生活移行の希望が示された場合は、安心して地域生活を送ることができるよう、専門的支援の継続的な提供やグループホームの整備などの支援に取り組む。(2頁)

とする。

内閣府『平成29年版障害者白書』によれば、知的障害者の施設入所率(16.1%)は、身体障害者のそれ(1.5%)の約11倍、精神障害者の入院患者率(8.1%)の約2倍²¹と極めて高い。また、地域移行は進んでおらず、志賀(2017)によれば、施設退所理由として「死亡」が「地域移行」を上回るという²²。

¹⁹ 大阪障害者センター「知的障害者の暮らし実態調査報告」2010年17頁。

²⁰ 麦倉泰子「知的障害者家族のアイデンティティ形成についての考察」社会福祉学45巻1号2004年。

²¹ 内閣府『平成29年版障害者白書』217頁。

²² 志賀利一「全国の障害者支援施設における地域生活移行の現状を考察する」のぞみの園ニュースレター53号2017年。

かながわ共同会の資料によると津久井やまゆり園における地域移行者数は、2009年から2016年の8年間で計16人であり²³、事件後も筆者が知る限りでは2人である。

そこで調査グループは地域移行についてたずねた。

尾野さんは、第1に、すでに事件以前から津久井やまゆり園は地域移行を進めており、国の施設利用者削減目標を達成していること、第2に地域移行を進めるには、単に「地域に出せ」というのではなく、現在不足している重度知的障害者受け入れ可能なグループホームを行政が増設する必要があることを指摘している。とくに第2点については、津久井やまゆり園の入所者の多数を占める重度知的障害者はグループホームに受け入れられないという実態があり、その改善を行政に働きかけているという。

尾野さん：元々ね、もう津久井やまゆり園自体、あの、指定管理を受けてからずっとやってきて、（平成）17年から地域移行も進めてきてるわけですよ。国が、12%削減。施設、各施設は、12%ね、利用者さんを削減しなさいって国から、指令…まあ、指令って言うのかな。

—支援費の時からね、数値目標挙げて。

尾野さん：そうそう。それをね。かながわ共同会はクリアしてるんですよ。要するに、グループホームを作って、出しても、津久井やまゆり園に、入所したい人達が多すぎるから。別なところから来るから、施設（定員）は埋まっちゃうんですよ。だから定員が減らないんです。僕はね、「（この話はすでに）政治の世界（でしか解決しない）でしょ」と言ってるんですよ。だからもっとそういう風（＝地域移行が進むよう）にするには、周りにグループホームとかいっぱい作る。それは行政でやるべきことであって、国がお金を出してね、グループホームを作る人たちに、もっと規制を緩和して、補助金も出して、グループホームを作らせる。大きな施設にいる人たちに、「こういうグループホームがあるから皆さん行ってください」って言って、「どうぞ体験入所してください」って、「それで良かったら契約してください」という。契約制度なんだから、「契約してグループホームの方に行ってください」という風にできる、本来そうすべきなのに、それがなされていない。今、要するにグループホームが足りない。ほとんど軽度の人たちのですよ。

—地域移行だと、軽度の人が入って、施設には重度の方がおられて…

尾野さん：そうそう。特に津久井やまゆり園の場合は、本当に最重度の5と6の人たちが入ってるわけですよ。重度の知的障害をもってる人達を、グループホームに行かそうとすると、殆んどダメなんですよ。結局、受けてくれないんですよ。

何でかっていうと、設備もない、支援する、要するにお金も付かない、色んな意味でね、そうすると、結局（施設）待機になるわけじゃないですか。施設に行きたいと思っても、例えば津久井やまゆり園に入りたいと言っても、結局、入れないわけですよ。いっぱい。だから待機になる。じゃあ、グループホームはって言うと、グループホームは受けてくれない。

知事にも直接その話もしています。局長にもグループホームを作るお金を出して下さいと。お金を出して、グループホームを作ってもらって、NPO法人などの団体にお金をつけてグループホームを作ってもらってくださいよ、それも重度の障害をね、受け入れてくれるように…

—重度障害を受け入れてくれるグループホーム？

²³ 社会福祉法人かながわ共同会「津久井やまゆり園の概要について」2017年12月11日。（筆者ら訪問時の説明資料、日本社会保障法学会第73回大会ミニシンポジウム「障害のある人の人権と家族・にない手の人権—津久井やまゆり園殺傷事件を契機に—資料集」90頁）

尾野さん：そうそう。いくらやっぱグループホーム作っても、軽度の人達で、重度の人達が行ったら、「ちょっとちは無理です」って断られたら意味が無い訳で。僕は、行政がやってくださいよって思います。

その上で、津久井やまゆり園 120 人の人達を、「じゃあこっちに」、「そこで何人」、「こっちに何人」っていう風にしていけばね、地域移行が出来るはず。なのに、そういうのはない、要するに、「(地域へ) 行け行け (と掛け声だけ)」、「(施設から) 出せ出せ (と掛け声だけ)」っていうのが、違うでしょと、言っただけですよ。部会の再生構想の時も、最初からその話をしました。

平野さんも、尾野さんと同様に地域移行のためには受け皿の整備が必要であると述べている。ただ、受け皿の整備には時間を要するため、以下のとおり段階的な地域移行

平野さん：百何十人を一挙に移すなんということは到底無理なので、少しずつ移していく中で、残った方は、とりあえず津久井と、芹が谷にいて、またそこから少しずつ出していくということになると思うんですね。

や、「こげら」や「はるにれ」等の優れた先駆的实践に学ぶ柔軟な対応

平野さん：「こげら」って有名なところだから、ご存知かもしれないんですけど、行動支援と移動支援やってるところで、職員がそのままグループホームに行く。知ってる顔がいるのは全然ちがいますから。そういうシステムが上手くできてくれば、大変なことにはならないと思いますよね。だからそういうのは、「はるにれ」なんかでもそういう風にしてると思うんですね。あそこが優れてるのは、サテライトって言って、ダメだった時に、バックアップ施設がある。そのような施設として、津久井なり、芹が谷なりに造っていければ、かなり上手くいくと思うんですけどね。

が必要であるとしている。

このように平野さんが地域移行に積極的であるのは、「本当にはよくわからない」という留保つきではあるが) 津久井やまゆり園利用者の大多数が重度ではなく地域移行が可能であるという認識

平野さん：実をいうとやまゆり園の中に、重度の方が多いと考えてらっしゃると思いますけども、本当に重度の方はいないと思います。最重度の方が、4 人か 5 人ぐらいじゃないかと思っています。

平野さん：やまゆり園では実際、本当にはよくは知らないですよ、ほくだってその子と一緒に暮らしたことある訳じゃないし。ただ、みてる限り、みんな穏やかですよ。本当すぐにでも、外に出してあげられそうな方ばかり。

に基づいていると思われる。さらに加えて、前述のとおり平野さんは、障害者の生活の場として施設はふさわしくないと考えていること、地域移行の実践例に関する情報を把握していること、親子とも相対的に年齢が低いことが、地域移行に肯定的な理由としてあげられよう。

一方で平野さんは、自身以外の多くの保護者が地域移行に消極的であり、その理由には、施設に対する安心感、福祉や地域移行に関する情報の不足、保護者の高齢化があるとしている。

平野さん：地域移行って、どういうことなのかわからないし。保護者は、施設に対して不満も持っていないですし…。そういうところが普通なのかな、だから問題意識が無いんですよね、全く。多くの方は何でそんな大騒ぎするのっていうし、（異を唱える人が）何を言ってるんだか全然理解できない。

—情報の不足はありますか？

平野さん：うん。共同会にも言ってるんですけど、共同会がそういう事を一切知らせようとしないのも悪いし、家族会も、何やってるんだかわかんない。そういう事は知らせてくれっていう事は言うんですけどどれも、そういう機会がない。さっき言ったように保護者会が、月一回もないので。

—行事ごとに集まるとかっていうのは…

ないです。だから全員で話すことは殆どできませんからね。例え集まっても、あまり話すことはないし、（保護者は）お年寄りが多いので。言っちゃ悪いですけどね、話が通じない。とんちんかんになっちゃうんですよ。年寄りばかりでしょうがねえよっていうと、あんたも年寄りって言われますけど（笑）。でも本当に、あそこではぼくなんか若手のほうですから。

息子である和己さんの地域移行についても平野泰史さんは積極的である。聞き取り調査時点においてすでに地域での生活体験等の準備を進めており、和己さんは2018年5月に施設を出てグループホームでの生活をはじめている（神奈川新聞 <http://www.kanaloco.jp/article/335509>（神奈川新聞20190103 閲覧））。

なお、現在、尾野一矢さんも、重度訪問介護制度を利用した地域生活を目指して準備中であるという。その契機について尾野剛志さんは、事件後に重度訪問介護制度の存在を知ったことであると話している²⁴。以前は施設以外の選択肢としてグループホームしか知らなかったが、重度訪問介護制度の存在を知り、一般の人と同じように生活するのが本来の人間の原点ではないかと考えるに至ったという尾野剛志さんの言葉は印象的であり、情報提供の重要性をあらためて確認することができた。

まとめにかえて

聞き取りの最後に、尾野さんは「日本の差別社会が、この事件のまづの発端になった。」、平野さんは「一番根底にあるのは、やっぱり人権問題ですよね。」と述べている。

障害者のなかでもとりわけ差別・人権侵害の傾向が一層強い²⁵ 知的障害者の人権保障について考えることは、「生存権・人間の尊厳の思想を考えるにあたっての原点としての意味をもつ」²⁶ 重要課題である。

調査グループは、本事件を、知的障害者をはじめ家族や福祉労働者の人権に法がどう向き合ってきたのかを正面から問うものであると受け止めている。

われわれに多くの示唆を与え、また検討すべき課題を提示した本調査に基づき、今後も共同研究を重ねていく予定であるが、障害者の人権を保障するための法的課題とは何か—障害者本人、家族、福祉労働者の視点から—、現行社会福祉制度の構造的課題とは何か、社会保障における人権の進展にとって何が必要かを考え続けていきたい。

²⁴ 2019年1月27日津久井やまゆり園事件を考え続ける会・対話集会における発言。映画「道草」（監督・撮影・編集：宍戸大裕）参照。

²⁵ 矢嶋里絵「知的障がい者の自立・自己決定・地域生活」日本社会保障法学会編『社会保障法』34号2018年。

²⁶ 井上英夫「人間の尊厳と社会保障の権利」現代日本経済社会研究7号1985年44頁。

(資料) 家族聞き取り調査

1 尾野剛志・尾野チキ子さん (家族)

日時：2017 年 11 月 4 日 (土) 14:00～15:30

場所：首都大学東京

参加者：木下秀雄、矢嶋里絵、金川めぐみ、鈴木静（一以下は、調査者による発言である）

一聞きたいことは三つです。一つ目は、そもそもやまゆり園事件より前に、職員の対応とか、生活の質ってどうだったのか。で、事件後という変化があったのか。二つ目は、再生基本構想への意見をお伺いしたいです。三つ目が、この事件を機に私たちは研究者として何を考えなければならないか、ご意見をうかがいたいです。

尾野剛志さん（以下、尾野さん）：一つ目から。まず息子は、元々知的障害で、僕が息子と会ったのは、息子が 4 歳の時にね。僕と血は繋がってないんですけど。僕はトラックドライバーをしてました。それで、（妻と）知り合って、息子が（できました）。息子が凄く可愛く感じて、この人（妻）よりも、息子にのめり込んで。息子と付き合って、最終的に、昭和 58 年に小学校 5 年生くらいの頃に入籍をしたんです。この人（妻）と一緒にクリーニング屋をしてました。クリーニング屋をしながら子育てをしたんですけど、（息子は）どんどん障害が重くなっていく。児童相談所とか色んなところに相談に行くんですけど、「いや、ご家族でまだ大丈夫です。このお子さんだったらまだ大丈夫です」って、行政はそんな感じだったんですよ、ずっと。

小学校でも、中学に入った時もそうだった。それと、教育委員会の方でも、普通学級に入れようとした。うちの子どもは普通学級じゃ無理だし、学校にやらないって言ったら、何とか義務教育だけでもって言うことで、養護学校に行くようになって。僕は商売してたから、送り迎

えができませんでした。社協のボランティアさんが、帰りだけでも、子どもさんを迎えに行きますよっていつてくれたのですが、一週間も持たない。うちの息子が自閉で、知らない人を嫌ってしまう。それから、狭いところが好きじゃない。親の車だったら良いんですけど、ほかの人の車に乗らない。乗る度に暴れてしまうわけですよ。それで、一週間も持たない状態で、どうにもこうにもならない。

県会議員の先生をお願いをしたら、厚木児童相談所へたった 1 回、ちょっと 1 回 30 分、県会、の厚木児童相談の所長さんと話ただけで、一週間後に県立の、あの、厚木のリハビリ療育センターの中にあるね、第一学園っていう子どもの入所施設に、入所決定が出来ちゃった。昭和の時代ですよ。行政の天下りとかなんかそういう人達の、僕らには理解できないんですけど、結局、議員さんの力っていうのはやっぱり凄いな。そのあと、何年か経って、そこは有期期限で、2 年ごとの有期期限で家族に帰すっていう施設だったんです。結局うちの子は、どんどん障害が重くなってしまって 17 歳の時に、リハビリテーションセンターの主任の人たちが、一人ひとりの子どもに対して審査っていうか、あるいはする中で、うちの息子は「もう多分お父さんおうちでは。暮らせませんよ」という風に、レッテルを貼られてしまったんですよ。もうそれからずっと施設暮らしになってしまって。ずっと過齢児になるまでいて、結局過齢児で、どうにもなんない。たまたま神奈川県その、やまゆり園再生計画が行われて、平

成 8 年に津久井やまゆり園に 160 名の施設になった。その時に、初めて、七沢第一学園の、過齡児だった、同じ仲間 7 人かな、8 人が、一度に入ったんですね。まず、入所の経緯としてはそういう事になります。

—お父さん、お母さんとしたら、入れるところが決まってほしかったのですか。

尾野さん：そうですね、（入所できる施設を）探してましたから。（入所した後）、息子がうちに帰るじゃないですか。二日、二泊三日ってかって。一日目は、なんとか良いんですよ。二日目になったらもう、色々やり始めましてね。うちは商売が洗濯屋してて、ボイラーとか、色んな、小さいお店だったから、狭いところにぎゅうぎゅう詰まってるから、危なくてしょうがない。子どもが触っちゃいけない、要するにクリーニングしたものとかもあったりして。「行っちゃだめよ」って言っても、言う事聞く子どもじゃないですから。だから、しょうがない。もうどうしても規制しなくちゃいけない。そうすると本人は、苛ついてパニックになってしまう。どんどんどんどん帰宅の回数が減ってっていく。うちのあの店が、ツバメクリーニングっていう名前だったんですよ。子どもが、「ツバメクリーニング終わり」、「やめとく」っていう言い方を始めたんですね。それで、「やまゆりで頑張る」っていうんです。それが、1 年半ぐらい続いたらもう、「ツバメクリーニングおわり」、「やめとく」でなくて、「もう終わり」、「やまゆりで頑張る」って言って、その後、ツバメクリーニングも言わなくなっちゃいましたね。ここ 4、5 年は、完全にツバメクリーニングは言わなくて。最近はね、毎週今、一矢んとこに、お昼ご飯食べに行ってるんです。

お店には青いテントなんかもね、張ってあったんですよ。

—屋根のひさし？。

尾野さん：そうそう。それで、ツバメクリーニングって書いてあるんですけど、「青いツバメクリーニング屋さんやめ」、「終わり」っていう風に、言うようになって。それで、今は「芹が谷にしたの」って自分で言うんですね。で、だからその「やまゆり終わり」、「やまゆり終わり」。少しずつ本当に理解するようになってきてくれた。この事件起きてからですよ。事件おきて、本人は事件のこと全然わからないんです。何もわからないんです。痛いこともわからないんです。なぜ病院にいたかもわかってなくて、だから…

尾野チキ子さん（以下、チキ子さん）：病院行ったのはわかってるんです。

尾野さん：病院行ったのはわかってるんだけど、なんで怪我しているのかはわからない。

—こんな、痛い思いして、ここの病院で入院してるのどうして？っていう感じなんですね。

尾野さん：「どうして」とか、「何で」とかっていう話もない、そういう問いかけみたいなのも一切ないんです。

チキ子さん：退院してきて、何日か何か月経ってから、「尾野一矢さんは白い救急車には乗りません。」って言いました。転院した先が、津久井の赤十字病院だったんです。「一矢さんは入院しません」って。それは、私にだけ教えてくれたんです。だから、その時からね、親に訴えたいことは話す…うん。私たちも一矢に目を向けられる時間っていうか、そういうのも出て、話す言葉も、この人にはこう言って、この人にはこう言ってと、わけて言ってくれているように思うんですね。

—お母さんにだから、言おうって思ってる？

チキ子さん：うん、話してくれる。他の方には、誰も聞いてないんです。だから職員さんも。私もびっくりしましたね。

一思いは沢山あるっていうのを伝えてくれてるんですね。

チキ子さん：そうなんでしょうね。

尾野さん：もともとね、うちの息子、言葉がほとんど出ない子だったんです。ちっちゃい時から、喋らない子…。本当に片言、「やめとく」、「ダメ」とかね。本当に、本当に片言の言葉しか、だから、一方通行でオウム返しみたいだったんだよ、ずっと。この事件になるまで、ほとんどが。だから、こっちからなんか言わないと。言う「やめとく」とか、「ダメ」とか、あの否定するような言葉でしか返ってこなかったのが多かったの。

ところがこの事件が起きてから、ちょっとだから僕らと会話できるみたいな感じ。逆に向こうが、僕らに聞いてくるんですよ。一矢がね、僕ら…僕に。最近、「お父さん、来週水曜日来る？来る？」っていう風に聞くんですよ。「来るよ、来るから待っててね」、って言うと、「来るー！」って言って、って嬉しい顔して笑ってくれるんですよ。

だからはっきりね、疑問文とそれから返ってくる言葉が、わかったって言うのがね、僕らとしては凄く嬉しいわけですよ。今までそんな事なかったわけですから。これがやっぱりね、四日目なんです。僕最初にそれを感じたのが、事件が起きた四日目に…。

一事件後四日目…。

尾野さん：そう、四日目に、初めて立川災害医療センターに。手術終わってから、僕は身体がこんなので、毎日行けなかったんで。四日目にたまたま孫が連れてって来て。

手術後っていうか、そのもっと前、結局彼と会ったのは、あの、彼が元気な時に施設の中で、事件起きたのは、(子どもは)解ってないわけですからね。それで会ったのが、その手術終わって四日目に、ぼくの顔見て。救急治療センターの中のICUの中に入っていったら、僕の顔見るなり、ぱっと、顔見て、「お父さん！お父さん！お父さん！」って、お父さんの言葉を30分くらいずっと何百回言ったんだろうかっていうくらい。本当にICUにいる時間、他の言葉一言も言わなくて、初めて、その、お父さんっていう言葉を、ハッキリね、そういう風な言葉で出してずっと言ってくれたんですよ。女房が側にいたし、孫もきてくれたんだから、ユウちゃんもいるんだよ、女房も…お母さんも居るんだよっていうっても、ちょっと見るだけで。ずっとベッドで僕の顔見るところ(見る)、で、みんながこっち行くところ(見る)、僕の顔見えずっと。言葉が「お父さん」だけだったんですよ。

それからですよ。本当に僕自身も、「一矢は俺の子どもで良かった」っていうのと、「一矢がちゃんとお父さんとしてみてくれた」と(思った)。それまでずっとそういう言葉が出なかったから。極端に言えば、義務的みたいなところもあってね、一矢んとこに会いに行ったりとか。僕自身が、家族会の会長をずっと17年間やってたので、一週間や、月に一回行っても、一矢に声かけて、一矢のそばに行っても、座っていて、お母さんと座ってて、ごはん、おにぎり食べても、「誰？」って言って。こうやって(食事を)あげても「誰？」って聞くと、「お父さん」って言う、普段もうそれだけなんですよ。

なんにも会話の無い子だったんで、元々がね。だから、それが急にそういう風になっちゃったから、僕自身が、感動しましたよね。一矢は本当に俺の子だってね、お父さんとしてずっと見ててくれたんだって思って、もう号泣しました。本当にあの日は。

だから、帰りに、もうこの人(妻)にね、僕

はあの、これから先一矢の事を、全で一矢の事で、もう生きてくよ、という風にして、どこで何があっても、どんなことがあっても、一矢の事も、自分の事も、きちんと話さなきゃいけない。やっぱり、この事件は大変だって事を、誰かが話さなきゃいけないね。僕は、そういう風にして話をまあ、話をするようにしたんですね。今の一矢との僕の繋がりがりみたいなのがあってね。

津久井やまゆり園そのものは、元々県立だったじゃないですか、神奈川県立。昭和39年の2月にね。全国で初めてかな？重度の知的障害の施設としてね、造ったんですよ。神奈川県第一号でね。津久井やまゆり園は当初100人で、翌年200人になって、こうして凄い古い昭和39年から建物が今は変わっているのですが、そういう時代の事を知っている人は、「平屋で汚くて」、「もう、長屋みたいで」、「みんな全部集合して、そんなんじゃ鍵かけてどうのこうの」って言っている人いましたけど。僕の（子どもが）が津久井に入所した時、平成8年で、もう再整備が終わって、綺麗になって、個室か、2人部屋だったので、全然そんなイメージが無くて。平成8年に息子は入所し、僕は平成10年からは、家族会の会長もしていました。

平成15年に、支援費制度もできた。同時に、指定管理制度を導入したんですね。それですぐ、神奈川県が指定管理制度をそのまま導入して、第一号に、津久井やまゆり園を、白羽の矢が立ってたんですよ。

それで、「たてる」って言っても、すぐは導入されず、僕も当時その、家族会の会長をしながら色々な所で、話は結構していました。その当時の社会福祉課の、〇〇さんっていう課長さんが僕を呼んで、「すいません。尾野さん……」ってということで、「実は、今、国が指定管理制度導入して、神奈川県もすぐやることになったんだ」と、それで「第一号の白羽の矢が立ったのは津久井やまゆり園なので、家族会家族を抑えてくれないか」（県立でなくなる意味で異論が

あろうだろうから）ということと、「あと一年間、尾野さんの気持ちでおさえおいてくれないか」ってということで。それまでに、県のなかに検討チームに作り、どういう委員を入れるかが問題になりました。

僕はもう10年以上も前の話だから忘れてしまいましたけど。そしたら、5人と言われたんですよ。僕が「そのなかに家族会、家族の代表っていないんですか」って言ったら、「いや、誰もいない」って。おかしいでしょ。「指定管理っていうことは、施設を運営するうえでね、家族からの意見を聞かないでね、検討委員会をするのはおかしいじゃないですか」って言って、「家族の代表を入れてください」と。僕が推薦したのが岩本さんって言って。神奈川県知事の知的障害者施設保護者会連合会、っていう長い名前なんですけど、それは、神奈川施保連という。全国的には、全国知的障害者施設保護者会連合会があるんですけどね、その神奈川版があって、その会長が岩本で、僕が副会長してたんで。「岩本を、検討委員会の委員に入れてくれるのであれば、僕も黙ってますよ」っていうと、「わかりました。」って。検討委員会の委員になっていただいて。その方はずっと神奈川県の県立施設を見直しとか、色々な時の検討委員会の検討委員に、ずっとそのままなってもらって。つい最近、ご高齢で退官になりました。家族会の会長も降りましたから。

指定管理を公募して、かながわ共同会が手を挙げた。そこから、愛名やまゆり園と、厚木精華園に、家族として施設見学に行ってきました。課長や皆さんに話を聞いたりした上で、「これなら県立施設と何も変わらないや」と安心しました。家族みんなで署名をして、指定管理はかながわ共同会にしてくださいって嘆願書もしました。何千人分だろう……。皆さんに書いてもらって、県知事に届けました。17年にながわ共同会に決定して、17年から指定管理を受けて、津久井やまゆり園はかながわ共同会運営になりました。

共同会の一番いいところは、職員の若さですよ。県立施設の職員の平均年齢から考えると、当時のね、もうはるかに10歳以上若い。今でも多分、おそらく20代後半ですよ。職員の平均年齢は。若いです。みんなバリバリで、必ず大学で、もちろんそういう（福祉系の）大学出た後、専門職の人達がやってきた。それで半年間の研修受けた上でやるから、ものすごい本当にエネルギーのある人たちばかりで。ちゃんと障害を持った人たちに対する向き合い方が良い。

親でさえできないことをね、うちの息子よりも若い職員がね、兄弟みたいにして、すごくよく接してくれている。支援していますよ。今もそうですけどね。

だから、津久井やまゆり園は最高の施設だよ。ずっと会長やっている頃から、今もそうですけど、ずっとそういう施設だと思って見てきました。僕も会長だったから、かながわ共同会の評議員会なんかの、評議員としても出席させていただいて、意見を言わせて言ってもらったりしています。

僕が17年間務めた会長職をやめた後に事件が起きました。やめたって言っても、僕がいる時に、職員はいたわけですよ。その職員を採用した職員とか、人って今みんないるわけだし。僕もよく知っている人間ばかりなんですよ全部。

他の職員なんかと、今でも飲み会とかするのですけどね。植松の直属の上司だった人たちも話をしているけど、植松は、本当に好青年だったのですよ。最初は、全然そんな、なんで？って感じるぐらいね、普通の子だし。すごく穏やかだし、それがどこでそうなったのかがね、わからないです。

職員も誰も分からなかったわけですからね。仕事を初めて一年半ぐらいたった時に、彼が刺青していたのが、わかりました。どんなふう隠していたのか知らないけど、それがバレてしまった。

かながわ共同会は、会議をしているんですね、

何回も。彼を辞めさせるのが良いのか、それとも、これから続けさせるのかっていうことで。最終的に結論が出たのは、「刺青だけで人間は判断できないでしょ」っていうこと。今後、支援していく上において、どうしたら、良いかってことで、彼に刺青を隠すようするにと決めました。普段長袖してればね、刺青あるのわかんないと。

ただ、週に1回とか2回、必ず入浴介助ありますから。夏になると、プールがありますから、そういう時は、ウェットスーツを着るっていう約束をさせました。それで入浴介助なんかしょっちゅうローテーションでやるから、一週間に一回あるかないかですよ。自分がその夕方の時間内に勤務していて、クリアはできた。

だけど、今度は、彼の心に、やっぱりどっかそこでおかしくなったのだろうと思いますね。友達とか、職員の仲間に、障害者を罵倒する言葉とか、まあ、何て言うのかな。差別する言葉とか、それから（障害のある人が）いなくなればいいよって言葉とかね、職員に話すようになったと。それで、職員の何人かから、ちょっと植松さんおかしいよってことになって、そのつど、指導しているんですけど、その時は、「はい、わかりました。注意します」っていう。でも、変わらない。

それで、ちょうど事件の起きる前の2月に、最終的に注意を受けて「僕、やめます」と言って、急にぽんと辞めちゃった。それで、これじゃ困るね、この思想では、あの反省してくれなきゃ、って言うので、警察と、相模原市に、通報してるんですよ。

一施設の職員として、尾野さんたち保護者から見たら、好青年で兄弟のようによくやっていたのですか。

尾野さん：そうそう。この人（妻）は知らないと思いますけど、僕は月に何回か施設に行っていました。家族会会長としてね。どこでも入れる鍵をもっていましたから、個室だろうと、寮

だろうと、自由に入れるわけですよ。

イベントなんかある前の日とか、みんな（職員）は勤務外でも、仕事しなくちゃいけないじゃないですか。そうすると、（植松は）「会長、ご苦労様です」と言ってくれる。本当になんか、普通の子なんですよ。（事件後に）顔を（報道で）みると（当時と）思いっきり違いますよ。あれ（事件後）は整形した顔なので。僕なんかが行った最初の頃、顔は、本当にあの、いい顔した、優しそうな人間だった。どこで間違っただろうな。職員として働きに行って、一緒に仲間としている中でも、心の中は見えないじゃないですか。

彼の心のなかに優生思想があったのも怖いね。思想を持ったこどもだったのか。ナチスドイツのどうのこうのっていうことも彼の中にあったけど、要するに見えてないから、分からないわけですよ。

一考え方は、見えないですもんね。

尾野さん：そう、それが見え始めたのが、辞めるちょっと前から。

一やめるちょっと前には、家族会会長から見てもおかしかったのですか。

尾野さん：僕は知りませんでした、やめてからも、僕らには知らされてませんから。家族会には知らせません。一か月一回、家族会をやるのですが、園の報告で、「どこの職員辞めました。」「次、新しい職員入りました。」はある。送別会とか無いしね。だから、全然わからなかったわけですよ。正直。

一あの事件があるまでは、良い職員だったと思っていたのですね。

尾野さん：そうです。知らない職員から職員もいっぱいいたわけですよ。事件起きるまで。職

員だって 130 人いるんですよ。大きな施設で、職員同士だって、顔は知ってるけど、名前知らないとかって、ありました。僕は家族会の会長をしていたから、職員は挨拶をしてくれますからね。職員は、最近の名札つけるんです。それまで、名札つけてなかったから。俺もそれも文句言って、指定管理制度になった時に、全部職員の名札つけるようにさせたんですよ。女性は特に、利用者さんと職員が区別つかないんですよ。

一成人の施設ですから、利用者と職員の区別がつかないから？

尾野さん：そうそうそう。大人っぽい利用者さん、子どもっぽい職員。区別がつかない。ちゃんと名札を前にしなさいと言っていた。「そうじゃないと、家族は 1、2 ヶ月に一回しか来ないでしょ、あなた方は、毎日いるかもしれないけれど、家族は、やっぱり 1 ヶ月に一回しか来ないから、職員の顔は、知っていても、名前を知らない人がいるんだよ。だから、やっぱり、何々さんって、（職員も）名前で呼ばれた方がいいでしょ。だからきちんと名札つけなさい」と、僕は散々言っていて。今は名札つけてますけどね、皆さんが。付けていてもポケットに入れて見えないようにしてるから、「名札見えないよ」って、今でも僕は言うんですよ。支援してくれることは大事だけど、やっぱり、そういう家族との繋がりとかね、そういう部分でもちゃんと欲しいな、っていうのがあって。そういう風に、職員には（言っていました）。まあ指導ではないですよ。

一そういう意味でも、普通の穏やかな、穏やかな施設の運営だったし、一人ひとりも良かった。その中の一人に植松が…

尾野さん：そうです。だから、皆さんが「なんでそんな施設、あんな施設とか」いう。植松が

出たおかげで、津久井やまゆり園全部が・・・ってなって。

—こんな形で注目されるのは嫌ですか。

尾野さん：そうです。もっと悪いのは、かながわ共同会も、津久井やまゆり園も、それに対して、一言も反応も何もしない。全部こうやって（両腕を抱えるようなジェスチャーで）、ガードしちゃったんですよ。ドームを作って、その中に入っちゃったんですよ。今でもそうですよね。取材拒否、まだ今でもしてるわけですから。マスコミが行っても、取材受けてくれないしね。理事長は、草光さんっていうんです。その前の理事長は、米山さんっていう人でその人たちに、また園長にもそうですけども、再三、口を酸っぱくして言ってるんです。

「この事件起きてから、なんでマスコミを利用…言葉悪いけど、何で利用しないんですか」って。マスコミには、かながわ共同会はこういう法人ですよ、津久井やまゆり園はこういう施設ですよ、というべきです。利用者さんは何人いて、こういう支援の仕方しているんですよ、職員はこうですよって、全部ね、オープンにしちゃえばいいじゃないですかって。

その上でね、全国の人たち達が、どういう判断するのか知らないけど、それで審判仰げばいいじゃないですか。隠しちゃうから、益々悪くなるんじゃないですかって、僕言ってるんですよ。これからもそれはずっと言っていく。最近少しずつね、入倉園長は最近少し考えるようになったみたいですけどね、今いる施設、横浜の芹が谷も取材拒否をしているわけですよ。なんで事件が起きるわけでもないし、何も無いのに、あんな汚い施設を、映したってどうってこと無いのに、なんで取材をさせないのかな。利用者さんの顔を映さなくたっていいわけだったら、写さないようにすればいいわけだし、何でオープンにしないのかなっていうのも…。

—自分たちで施設も作ってきたし、一生懸命やっているんだったら、それを隠さない方がいいっていうのが、尾野さんのお考えなんですね。

尾野さん：そうです。だって、悪いことしてないわけで。素晴らしい施設なんだから。支援の仕方だってね。全国の色んな人たちから、色々なこと言われたりしてますよね。まあ、見方によっては多少ね、この辺はちょっと違うのかなっていう支援の仕方があるかもしれないけど、家族から見れば、本当にあの申し分ない施設です。今以上に要求することは出来るかもしれませんが、それは逆に、県立でしたからね、行政に話すべきことでね、だから、園の支援について必要なことは、もうほとんどしてくれてますから、本当にあの僕ら心配ないと思ってるんですよ。はい。

一家族会とも良い環境を作ってこられてたのも聞いてて分かります。次に再生構想についてお聞きします。先ほども言われてたのが、施設は居場所じゃないとの批判についてです。尾野さんは、グループホームでも大規模施設でも、場所が問題ではなくて、そこで穏やかに暮らせる場をどう作るのが大事なんだって言っていました。ご意見をお聞かせください。

尾野さん：元々ね、もう津久井やまゆり園自体、あの、指定管理を受けてからずっとやってきて、（平成）17年から地域移行も進めてきてるわけですよ。国が、12%削減。施設、各施設は、12%ね、利用者さんを削減しなさいって国から、指令…まあ、指令って言うのかな。

—支援費の時からね、数値目標挙げて。

尾野さん：そうそう。それをね、神奈川共同会はクリアしてるんですよ。要するに、グループホームを作って、出しても、津久井やまゆり園に、入所したい人達が多すぎるから。別なとこ

ろから来るから、施設（定員）は埋まっちゃうんですよ。だから定員が減らないんです。僕はね、「（この話はすでに）政治の世界（でしか解決しない）でしょ」と言ってるんですよ。だからもっとそういう風（＝地域移行が進むよう）にするには、周りにグループホームとかいっぱい作る。それは行政でやるべきことであって、国がお金を出してね、グループホームを作る人たちに、もっと規制を緩和して、補助金も出して、グループホームを作らせる。大きな施設にいる人たちに、「こういうグループホームがあるから皆さん行ってください」って言って、「どうぞ体験入所してください」って、「それで良かったら契約してください」という。契約制度なんだから、「契約してグループホームの方に行ってください」っていう風にできる、本来そうすべきなのに、それがなされていない。今、要するにグループホームが足りない。ほとんど軽度の人たちのですよ。

一地域移行だと、軽度の人がいて、施設には重度の方がおられて…

尾野さん：そうそう。特に津久井やまゆり園の場合は、本当に最重度の5と6の人たちが入ってるわけですよ。重度の知的障害をもってる人達を、グループホームに行かそうとすると、殆んどダメなんですよ。結局、受けてくれないんですよ。

何でかっていうと、設備もない、支援する、要するにお金も付かない、色んな意味でね、そうすると、結局（施設）待機になるわけじゃないですか。施設に行きたいと思っても、例えば津久井やまゆり園に入りたいと言っても、結局、入れないわけですよ。いっぱい。だから待機になる。じゃあ、グループホームはって言うと、グループホームは受けてくれない。

知事にも直接その話もしています。局長にもグループホームを作るお金を出して下さいと。お金を出して、グループホームを作ってもらっ

て、NPO 法人などの団体にお金をつけてグループホームを作ってもらってくださいよ、それも重度の障害をね、受け入れてくれるように…

一重度障害を受け入れてくれるグループホーム？

尾野さん：そうそう。いくらやっぱグループホーム作っても、軽度の人達で、重度の人達が行ったら、「ちょっとうちは無理です」って断られたら意味が無い訳で。僕は、行政がやってくださいよって思います。

その上で、津久井やまゆり園 120 人の人達を、「じゃあこっちに」、「そこで何人」、「こっちに何人」という風にしていけばね、地域移行が出来るはず。なのに、そういうのはない、要するに、「（地域へ）行け行け（と掛け声だけ）」、「（施設から）出せ出せ（と掛け声だけ）」っていうのが、違うでしょと、言ったんですよ。部会の再生構想の時も、最初からその話をしました。あの部会出来た時に、まず一番最初に僕らの意見を聞くのかと思ったんです。ところが、1 回目から 6 回目まで、一度も僕ら呼ばれませんでした。それで何の話したかって言うと、全部、意思確認の、意思決定、意思確認の話しかしなかったんです。部会で。要する、グループホームとか、そういうところに出すための、先に…

一意思決定支援の議論は、議事録にありますね。

尾野さん：そうそう、（意思決定支援は、意思の先に）物（グループホーム）がなきゃできないでしょって逆に。なんで受け皿がなければいけないし、受け皿があった上で、やるべきでしょって言うのが僕の考え方です。

一重度の人が暮らせるグループホームがあれば、選べるし、その意思決定の支援もできる。重度の人たちが、じゃあ行きたいって言って、

行けるところがあるのかということですね。

尾野さん：そうそう。このことに対して、神奈川県知事が、去年の9月に、150人規模の施設を作りますよとテレビの前で言いました。9月だか11月かな？当時の基本構想ができて、青写真も出来たんですよ、建物とかなんかのね。そこで、建設費が示されました。60億円から80億円って金額が出た次の日から、反対の意見が出て、全国から集まってきました。「何でそんなお金をかけて、津久井やまゆり園をあそこに作んなきゃいけないんだ」と。「施設を壊しちゃって、グループホーム作ればいいじゃないか」って言う。その人たちは、大規模施設って言わない、収容施設っていう言葉を言うんです。それは、僕は、収容施設って言ったら、昔のね、コロニーの時代の話でしょ。今は、そういう収容施設じゃないですよと。(反対する人に)言ってもね、わからないんですよ。だから、山奥に150人収容施設でね、鍵かけて、なにをして、って言って、(現状の津久井やまゆり園を)全然理解がしてない人たちが、全国から集まってきた。津久井やまゆり園の事見たこともない、神奈川県も来たことの無い人たちが、お金の事だけで反対している人たちがほとんどです。精神障害の人達とか、車椅子の身体障害の人たちですよ。知的障害の関係の人達では、グループホームをやっている人たちが、あの中に何人かいるだけでね。そういう人たちが、わーっと騒いで、結局県に、意見書とか色々出しました。そしたら、県知事も「わかりました、見直しましょう」って12月に言って、結局1月から部会が出来ました。僕は、家族が意見を言っていること自体ね、部会も聞いていないのと思うんですよ。

一尾野さんは検討委員会でも家族の意見は聞かれてないし、社会にも伝わってないと感じているのですか。

尾野さん：そうそう。7回目の部会に行きました。家族会や園の職員も。園長も出席して説明しました。事件が起きる前の入所が150…135人だったんで、それだけの人数が(住める施設規模に)戻してくださいという話もしたんです。

最終的には、この構想になりました。(施設と地域移行の)2つの方向性になっているんです。構想のなかに、どんなに障害が重くても、あの、一人ひとり意思はもってるから、意思の確認をするべきだ。意思を確認して、本人がいって言う所に行くべきだと書かれています。僕は、どんな子どもでも、どんな障害を持っていたって、意思があると思うんですけど、自分の気持ちをね、ほかの人に伝えられるかどうかだと思います。何年もずっと一緒に暮らしたり、支援していけばね、5年も10年も知っていけば、理解は出来るかもしれない。でも、たった半年か、1年2年で、それも、専門の職員が何人かと、誰が何人かだけで、2年間かけて意思確認を、意思決定をするって言うてるんですね。僕は間違ってるなと思っています。結局それを意思確認して、横浜にいたいのか、津久井にいたいのかっていうのを判断すると。意思確認の、仕方自体も僕は…

一意思確認は誰がするのか、どうやってするのか。

尾野さん：そうそう。それとどのぐらいの時間をかけてやるのか。軽度の人達で、自分で言葉が言える、ある程度分かる人達で判断できる人達は、それは意思確認も、意思決定もできるでしょうけど。うちの子どもも、片言で話すことは出来るけど、じゃあ、何も言わないのに。「一矢、どこで住みたい？お父さん家住みたい？園で住みたい？」って言っても、「やめとく、やめとく芹が谷にしたの。」とだけですからね。

一実際に息子さんにどこで住みたいかを聞いたんですか。

尾野さん：そうそう。「もうお家辞めとくだから」、「今は芹が谷にしたの」という言葉しかないですから。それしか出ない。

チキ子さん：「芹が谷にしたの」と。

尾野さん：そうそう。本人がどう思っているのかわかって聞くには、何年もかかると思うんですよ。それと、今、芹が谷に居る人たちは、130人、または120人は、県立施設でずっと、入所してきた人達です。一番長い人で45年、施設に居るわけですよ。もう70歳近いんですよ、今いる人達の中で。一度もよそ行ってないんですよ。行ったことない。そういう人たちの、お母さん・お父さんはね、80代90代ですよ、皆さん。その人たちに、どうやって、このことを説明して、理解してもらうのですか。本人も70歳になるおじいちゃんに、普通ならおじいちゃんだよね、65歳になるおじいちゃんに、それを喋ることも出来ない、何も出来ないおじいちゃんに、どうやって「あんたどこ行きたいか」と聞くのか。

僕は、部会の人達にも、それを言ったんですけどね。津久井やまゆり園、芹が谷園舎に来て、利用者さんと一度でも会った事あるんですかって。ちゃんと会って、言ってる話ですかと聞いた。意思確認できるような子どもたちは、出来るかもしれないけど、何年もかかるんですよ。こんな3ヶ月5ヶ月で意思確認できますか。2年で意思確認しますって言ってるけど、実際に出来るような子ども達、誰もいないですよ。ということを僕は言ってるんですけど。結局、まー、国のあり方で…。

一改めてこのお話をお聞きして、一矢さんや入所されてる皆さんと、長い付き合いがあるからこそその言葉だというのがよく分かりました。

尾野さん：僕は、どこへ行っても、開口一番に皆さんに言ってるんですけどね、匿名もそうで

すけど、日本は差別社会です。日本の差別社会が、この事件のまづの発端になった。元々、日本は戦争に負けて、日本国憲法が制定されて、初めて民主主義が出来たんですよ。その次の年に身体障害者福祉法が出来てるんですね。だから全然、遅れてるんです。日本自体が。福祉に対しても障害のことに対してはね。

国際権利条約（＝障害のある人の権利条約）は、素晴らしいと思うんです。だけど、日本の現実、世界に追いついていない、福祉国家としては、世界的に言うと50何番目かな？福祉の悪い国なんですよ。なのに、それこそ世界一とか、世界二のね、そういうところで作った、国際権利条約を、何もわからないまま、背伸びも、背伸びも、下駄履いて批准したでしょ。批准したことは間違っていないかもしれないですけど。

一障害福祉の質を上げてから、批准するべきだったってことですよ。それをみんな望んでいるということですか。

尾野さん：そうそう。批准する前に、障害者虐待防止法作りましたよね、それで、批准した年に今度は、障害者差別解消法できましたよ。実際それが、活用されているかって言うと、ほとんど活用されてない。何のための法律を作ったのかな。本当にそれがね、日本の、政治のあり方も含めてね。まあ安倍さんだけじゃないでしょうけど。国の、日本の差別社会が生んだことが、背景にあるんじゃないのかなって。

一尾野さんが最も差別だと思う場面はありますか。

尾野さん：（障害のある人を）見るのは、ほとんど差別です。差別ですよ、正直な話ね。色んな意味で、障害者っていう言葉自体が、僕好きじゃないんです。障害者っていうと、反対は健常者でしょ。そうすると、健常者の世の中で、

障害者って言うと、これで差別しちゃう。もう、障害者っていう言葉だけで、差別されているじゃないかなって。

一違う人達って見られているという意味ですか。

尾野さん：そういう意味ですよ、そうじゃなくて、障害というね、個性があって、生まれてきているとかね、生活している人達なんだ、っていうことを理解してもらわないと、僕はダメだと思うんですよ。障害者っていう意味で、色眼鏡でね、見ることで自分が差別だと思ってます。

国の制度が、障害者って言葉になってるから、どうしても言わざるえないんですけど。僕は、本当にその言葉が好きじゃないんですね。だから、もっと違う言葉があればいいなと思います。それが、子ども達なんか見てても、はっきり、学校なんか特にそうですね。

子ども達は、心が素直だから、全部すぐ出るじゃないですか。馬鹿にする言葉とかも含めてね。それは、親が言ってきたことを子どもは覚えてしまう。親はね、どっかの近所の人なんか見て、あそこのどうのこうのっていう言葉をね、差別した言葉を平気で、無意識に使っている。それを子どもは、素直に受けちゃうじゃないですか。(子どもが)大人になって、親になり、その親から産まれた子ども達ももっと大変ですよ。そういうことも含めると、学校のあり方など全てにこう繋がってくるんですけどね。学校のあり方、子育てのあり方とか、そういうことも含めて、もっともっと(考えていかなくてはいけない)。僕は、この障害を持った人たちに対してのね、やっぱり配慮って言うかな、そういうものを、あの、持ってもらえるような行動、仕組みを作ってもらわないといけない。

一差別をしちゃいけない仕組みを作んなきゃいけないという意味ですか。

尾野さん：そうそうそう。差別がないような…ね。そうしないと、日本の差別がなくなるのは、100年も、もっとかかるかもしれないね、200年もかかっても、無くならないかもしれませんけど。ただ、じゃあ無くならないから、じゃ、どうでもいいかって言うとね、ダメなので。だから、僕らは声を出してって、そういうことが少しずつ。それこそ、塵も積もれば山となるっていうことなんで、100年たって、ああ、このくらい変わったよね、って。100年前から比べたらもう、全然違うよね、って。障害を持った人たちも、今一緒にね、同じように暮らしてるんだよね。っていう。そういう、あの、世の中に出来ないかなっていうのがね。ただ、自分としては、後5年か、6年しか生きられないって思ってるから。

*聞き取り調査実施については、首都大学東京研究安全倫理委員会の承認を得ている。

また、本内容を本誌に掲載することについては、事前に尾野氏による内容確認・承諾を得ている。

2 平野 泰史さん（家族）

日時：2017年11月4日（土）16：00～18：30

場所：首都大学東京

参加者：木下秀雄、矢嶋里絵、金川めぐみ、鈴木静（一以下は、調査者による発言である）

一お聞きしたいと思っていることが3点あります。やはりこのやまゆり園、津久井やまゆり園って事件前にどのような施設だったのか、ケアの質であるとか、職員体制とか、ご家族から見てどうだったのか、それが事件後と、それと事件に至るまでどうだったか。

もう一つは、やはり今県の方でも再生構想が出されていて、その中で大きなどこでどの様に住んでいくか、って言うところが問われています。お考えをお聞きできたらという風に今日思っています。これが2つ目の再生構想について。

3つ目は、平野さんが社会で考えて欲しいことです。平野さんの話しやすいような形で、どこからでも結構です。

平野さん：うちの息子は、今年6月でちょうど3年、事件が起こったところで、ちょうど2年の在園期間でしたので、はっきりいいますとそれほど詳しいわけではないんですよ。というのも、やまゆり園の保護者会っていうのが、月に1回もないんですね、年間8回あればいいほうかな。なんとか祭りとかがあって、その月にはないので。ですからその時しか他の家族と会わないし、あんまり話す時間も、喋る事もないし。ご高齢の方が多いので、全員が出てこられているわけではなくて、あんまり横のつながりはないんですよ。家族会っていても、そんなに発言される方がいるわけじゃないし。そういう意味では横のつながりが無いっていうのかな。

前にいた児童施設では結構父母の集いとか多

く、それから1週間に少なくとも一回は行ってましたので、良く分かっていたんですが、やまゆり園はね、なかなか中が見えない。何をしているか、分からない部分がものすごく多いんです。

いつも園にも言ってるんですけど、いろいろなことを園の方も話す機会が少ない。要するに保護者会の時くらいしかないの、何をしているかっていうのはなかなか伝わってこない。

入った当初、日中支援、日中の作業というのが、月曜日から金曜、午前午後と、普通はどこ施設でも、大体そういう風にあることになっている訳で、もちろんそのような説明があって、入ったんですが、どうもしばらくして聞いてみると、実は毎日に行っていないっていうんですね。要するに職員が少ないので、8つのホームにいる利用者が、日中の作業の内容によってグループ分けがされていて、4つかな、ABCだったかなグループがあって、それぞれに合ったプログラムのところへ行くんですが、全員は受け入れられないということでした。

それで「ピックアップ」って言ってましたけれども、その日ごとに参加する人を選んで、行けるとしても週に2日か3日、しかも午前か午後のみしか行けない、って言うんですね。だからほとんど日中も、ホーム、自分たちの生活の部屋にいて、そこにいる職員が適当に相手をしている、というぐらいの事ですね。1年目は大体そういう感じだった。

それでこちらがなんとかしてくれて話をしたせいか、人手が少し集まったのか、2年目ぐらいから一応、月曜から金曜日までやってると

いう話だけは聞きましたが、実際どのくらいやっていたかはよくわかりません。

つまり恒常的に人手が足りない、他の施設でもそういう事が多いようですけれども、特にあそこは不便な場所なのか、一応常勤の職員は共同会から派遣されていますので、何とか足りてみたいでしたが、非常勤というか、アルバイトっていいですか、そういう人たちを募集し、その日中支援の手伝いをして貰うのですが、それが全然集まらなかったみたいで、常に募集をしているようでした。

行かれた方いらっしゃるんですか。ものすごい山の中というか、初めて行ったときはもうゾッとしましたよね、こんなところにとっても入れたくない、と思いました。写真見れば分かりますけれども、向こうが深い谷で、下に川が流れてゴルジュっていうんですか、要するに河原のない川ですね。相模湖のダムの下から、津久井湖まで、川が流れていて、谷の深さが10mから20mくらいありますか。何年か前、谷にかかる橋の上から飛び込みがありましたけれども、そんなところで。要するに谷間で、冬はもう5時になると完全に真っ暗。で、サルは居るわ、イノシシは居るわ、サルなんか群れで庭に出てきますからね。それから、クマも去年何回か出たって聞きましたし。バスも1時間に1本あるかないか、相模湖駅から、橋本駅まで直通で行かないんですよね。津久井湖の手前のバスのステーションですか、そこまで行って、そこから乗り換えて行かなきゃいけないんで、非常に不便なところですね。

だからなかなか人が集まりにくい。できた当初からそうだったみたいで、100人くらいの利用で始めたみたいですが、職員は殆ど素人だったそうです。専門職が集まらなくて。それが何年か続いて、県立ですとやってたんですけども、居た方に聞くと、職員の質は非常に悪かったということですね。その後2008年ですか、共同会が指定管理を受けてからはだいぶ職員の質は良くなった、ということですが。

一指定管理になってから良くなってきたんですね

平野さん：僕の印象では、職員の質としては、施設の中では良い方だと思います。非常に対応もいいし、実際うちの子が入ってから、2年間でかなり状態が良くなった。もっともちょうど25、6歳で、一つの落ち着く時期だった事もあるかもしれませんが。

両方がうまくかみ合ったのだと思うんですけども。そういう日中支援が不足していて、なかなか外にも出られない状況の中でも、ずいぶん状況は良くなった。殆んどパニックになることもないし、電車にも乗れるようになったし、旅行も何回か行ったんですよ。

事件のある前に計画していて、事件後何回か旅行に行ったりして、非常に状態は良かったんです。ただ事件後他園に移されて、ひどい状態になっちゃったんですよ。

やまゆり園自体は、施設の中ではそんなに悪くはない。ただし、土日なんかはほかの多くの施設と同じようにどこにも行けませんし、行っても、せいぜいドライブぐらいですね。

ほかに年に1回遠足というのがあって、日帰りでバスで出かけるのと、それから、あそこは年に1回職員が1泊旅行に連れて行ってくれるんですね。全員一緒じゃなくて、3人くらいずつ、職員は2人くらいついて、全員連れていけるわけじゃないんですが。中には寝たきりみたいな方もいらっしゃるんで、そういう人は、無理でしょうけども。もっとも、事件後はやってませんけども。うちの子も2回、群馬と、伊東に旅行に行きました。ほかにやまゆり園独自のヘルパー制度っていうのがありまして、半分職員のボランティアみたいな事なんですけど、職員に時間があって行ければ食事などに連れて行ってくれる。

一外出支援ですか？

平野さん：そうなんですけれども、建前はこちらが行かせてくれって頼んで、職員に空いてる時間があれば連れていってくれるっていうんですけれども。

— 一時間外ってということですか？職員も。

平野さん：そのようですね。やまゆり園の後援会っていうのがあって、そこからいくらお金が出るらしいんですが、どうもそういう説明もあんまりしてもらえないのでよく分からないんですけれども、たぶんせいぜい食事に行くくらいですね。うちの子も年に3回くらい連れていってもらったかな、焼き肉とか。それくらいかな、外出っていうのは。あとは、うちの子は外に出るのが好きなので、土曜か日曜毎週必ず連れ出しに行っていましたけれども。まあ総じて職員自体は他の所から比べると質は悪くはないですね。もちろん全員では無いかもしれませんが。それはね、一つはね、給料が良いってことはあるようですね。指定管理なので、お金が出るわけです。一般の施設に比べると、年間に100万くらい違うという話を聞いたこともあります。

— 一人のお給料が、プラス100万円ですか？

平野さん：伝聞なので実際はわかりませんが、平均で100万くらいプラスされているということのようです。額は定かではありませんが、高いのは事実のようです。ただ、息子が事件後一時移されていた施設も指定管理なんですけれども、そこはかなり質が悪かったですけれども。

— そんなに違うんですね。やまゆり園では職員は、年代的にはまんべんなくいましたか？

平野さん：割とまんべんなくいますね。若い人も居れば、上の方へいくとホーム長とか課長とかいますけれども。

共同会は全部で四つ施設を持っているので、毎年職員の異動があるんですね。ただ津久井という場所にあんまり希望者がいないじゃないかと思うんですよね。山の中なので。中には山梨方面から来ている方もいて、津久井の方が良いという方もおられると思いますけれども。多くは厚木方面から来られる方が多いのかな、厚木から来るとなると、朝なんか渋滞もあるので、かなり時間かかる。何年か前、大雪が降ったことがあるんですね、2月に。あの時はもうほとんど誰も来れなくて、2日くらい籠城状態だったみたいですね。

— 雪が降ると大変な場所ですね。

平野さん：冬は路面も凍ってるみたいで怖いんですね。だからそういう意味じゃ非常に不便なところなので、実はやまゆり園のグループホームが、4つあるんですが、そこに、20…何人…25人くらい入ってるのかな？

話を聞くと、移動支援を使っているということのようですけれども、実際にあの場所からどこかへ連れて行く事がどの程度出来るのかどうか。

実をいうとあの場所へ施設を建て替えるっていうのは、僕はやめた方が良く思っています。もうちょっと街中へできればと思います。例えば、今居る横浜の芹が谷なんか都会なので遊びに行くにはとても便利です。それに、施設では使えませんが、行動援護の事業所とか結構ありますからね。相模原は移動支援をしている事業所はありますが、行動援護は全くないようなので。

— 近くに事業所自体が無いんですね。

平野さん：うちで使おうと思って調べたら、町田に一つあってそれは職員が2人しかいないんです。実は行動援護、何とか市と交渉してとったんですよ。何回か使ってるんですが、ご存知

とは思いますが、施設にいとそういう外部のヘルパーっていうのは使えないんですね、法的に使えないんですが、家に帰ってきた時は良いということでとりました。その市のケースワーカーの言い方では、家に帰った時は使ってもいいけども、自分の都合で帰って来た時はダメだっていうんですね。分かります？ これ。自分の都合で、家に戻して、その時使うのはダメだっていうんですね。

—自分っていうのは親御さんって事ですか。

平野さん：そうです。じゃあ、何ならいいのっていうと、施設の都合で戻す時は良いって言うんですよ。要するに施設が、家に戻してくれて時は、まあ、要するに建前なんですけど、そういう話です。

—施設の都合なら良いけど、親御さんだとダメなんですね。

平野さん：しかも、帰る日は使えない。

—まだ施設の延長って事ですか。

平野：使えないっていうのは何故かっていうと、施設支援費が出ているから。つまり、二重申請になっちゃうということですね。ずいぶん交渉したんですけど。厚労省にも確認したんですけど、ダメだって言うんですね。

できればその施設から使いたいっていうのは、うちの子家に帰ってくると寝ないんですね。障害を持っている方はそういう方多いんですけども。ほとんど寝ないんです。だからうちに帰ってきて次の日使おうと思うと、全く寝ない状態で行かなきゃいけない。そうすると機嫌が悪かったり、パニックを起こしやすかったり、それから、てんかんも持っているんで、てんかんの発作が出やすい…。そんなに頻繁には起こしませんけども、そういう可能性もあるというこ

ともあって。できれば施設から行かせたいんですが、どうしてもダメだっていう。

今回の再生計画の中には、施設から使えるようにするっていうようなことが書いてあるんです。詳しくは知らないんですけど、(費用が)県と自治体と少しずつ出るのかな、全部が国じゃなかったような気がするんですが。ただ、県は直接言える立場じゃないって言うんですね。聞いたら、なんとか厚労省にだって交渉するとは言っていましたけども。果たして、サービスが使えるようになるかどうか、

30年度の障害者総合支援法の見直し項目の中に入ってたと思うんですけど。実際どうなるか分からないですよ。使えるようになれば、施設にいても土日は、かなり自由に外に出られるってことになりますけども。それがないと、施設の利用者はほんとに外に出られないですよ。特に親がいない方なんてほとんど出られないと思います。

事件以後、施設では遠足もないですし、泊りがけの旅行もない。ヘルパー制度も、多分職員が足りないんで、殆ど使えないでしょ。そうすると、散歩かドライブくらいしか外に出られない。現在第三者後見人がついている方が17名いるんですけども、ほとんど出られないんじゃないかな。最近は、園の方も再生構想を意識してか、近くの喫茶店に連れて行ったとか、中華街にご飯食べに行ったとか、そういう事盛んにアピールしていますけども、それももう、アップアップの状態だと思うんですよ。

結局、横浜に移ったけれども職員は足りない。たとえ給料が良いとしても、なかなか職員が集まらない。ほかの事業所はもっと大変だと思うんですけども。

現在のやまゆり園で、日中作業がどうなっているかということ、実はやっぱり人数が足りなくて、芹が谷でも、聞かないとなかなか分からないんですけども、移った当初は、人がいないから月曜から木曜までしかできていないっていう話だったのが、今は、一応金曜までやってま

すけれども、午前中1時間、午後1時間。何故かっていうと、ユニット20名ずつ—6ユニットあるんですけども、そのユニットを3つに分けて、3交代で行かせるんだそうです。午前中1時間ずつ、午後も1時間ずつ、あとは部屋にっぱなし。体育館にトランポリンを持ってきて、それを持ってきて、それをやらせてるようなことは言ってましたけども、なかなかできにくいと思うんですね。

職員がいないんで。人手不足で、サービスが行き届かないっていうのはまあ、どこの施設も似たり寄ったりですけども、そういう状況ですね。(2018年4月からは月～金で、全員、午前2時間、午後2時間の作業及び運動の時間をとるという話ですが、どこまでできるのかは分かりません。)

—加害者との面識は？

平野さん：ないです。ユニットが違ったので。お祭りの時、確か司会かなんかやってたような気はするんですけどね、あんまり記憶がないんです。会報かなんかに載ってるらしい…うちにあるものには載ってなかったの。うん、わからないですね。

—この事件が起きた、って聞いた時どう思われたり、どう考えられましたか。

平野さん：びっくりしたのはびっくりしましたが、そんなに不思議な気はしなかったですよ。やっぱり、そういうことが起きたなって感じはしましたよね。うちの子、実は、前の施設にいた時に虐待を受けたことがあって、虐待っていうのはどこにでもあるんですけど、前の施設でも結構あったんですよ。そういうのを見たりしてましたし、それで、やまゆり園に入った時に、虐待に関してどういう防止策を取ってるかっていうのを、ちゃんと示してくれちゃって初めて最初に要望したんですよ。

当時よその園でも虐待事件があったばかりだったので、特に希望して。一応父母の、保護者会で説明してくれと言ひ、示してもらったんですけど。虐待自体は、起きてもちっとも不思議じゃないと思ってたし。特に大規模な施設っていうのは、必ず起きる条件はそろってますからね。

管理された状態で、行き場のなくなった職員がそういうことをする。閉鎖された中ですから、そういうこと(＝虐待)はなんか、あたり前になっていく。だんだんそういうこと、別に普通のことだと思って、下の人間もそれを、そういうの見てますから、あたり前ことだと思っちゃう。

上から言われれば、有名な囚人実験じゃないですけども、管理者がいて、それに従って、そういうことがどんどんエスカレートしていくのはあり得ることだと思います。もっとも、あれだけ大量の人を殺すっていうのはかなりびっくりしましたけども。

ただ、それほど不思議な気もしなかったっていうのが正直なところ。だから、(事件直後に園には)行かなかったですもの。電話で安否確認はしましたが、すぐには行かなかった。一つは、行っても何の役にも立たないし、かえって邪魔になると思ったの。それに何かあればすぐに連絡がくると思いましたので。夜になって少しは落ち着いたかなと思い、もう一度電話して様子を確認しましたが。あんまり不思議な気はしなかったですね。今でもまた起こりうると思いますよ。そういう土壌はありますからね。

—今の話をお聞きするとやまゆり園だから起きたっていうよりかは、どこの施設でも起こりうる。そういう密室性を問題にされているのですか。

平野さん：ええ、どこの施設でも。特に規模が大きくなればなるほど、起こりますよね、だっ

てなくならないでしょ、この前も茨城でありましたけど、絶対表に出てこないのもいっぱいあるでしょうから。

平野さん：前の施設で、うちの子もひっぱたかれたり、プールに突き落とされたりしたことあったんですけども、それを県に全く報告していなかったんです。要するに…

—それ、職員が、ですか？

平野さん：そうです。結局、園長どまりで。監査の時かな、それをなんか、誰かが通報したのかな。監査の時に聞かれて、県にさんざん叱られて、やっと県に報告して、それでも保護者に言わなかった。その時点では、うちには伝わっていなかった。半年くらいしてやっと県に言われて、ようやく我々に報告して。すったもんだしましたが、なかなか謝罪もしないんですよ。

—謝らないんですか。

平野さん：さんざん言って、文句言って、やっと謝って貰った訳です。実は、うちはその時もその施設を出ることに決めていました。丁度過齡児問題があって、5年で出るように言われていたので、うちも色々探していて、グループホームとか探したんですが、やっぱりなくて。で、その当時相談員の方が知り合いがいるからと頼んでくれて、やまゆり園に何回かショートステイしてたんですね。

—津久井やまゆり園でですか？

平野さん：そこしかなかったの。そのうち、やまゆり園の方から、「平野さん、実は、空きができた」って言うんですよ。「本当、平野さんのお子さんはすごくいい子で、是非入りませんか」とか言うんです。うちは実をいうと、申し込んで無かったんですよ。やまゆりに入り

たいとは。

—待機者リストに入っていなかった？

平野さん：うん。やまゆり園の方から、次はショートステイ1か月ぐらいどうですかって言われたりして。そういうの続けてたら、空きがあるから入りなさいと。どういうことかという、前の施設の方から県の方に言って、入れさせることにしたらしい。要するに追い出されたようです。文句ばかり言ってうるさいって。詳しい方に聞いたら、「それはもう間違いなく、県から裏を通したんだ」って言われましたけど。実は（津久井やまゆり園は）県立施設なんですけど、（入所）申し込み書っていうのはないらしいんです。

—そうなんですか。

平野さん：ないという話です。どうやって申し込むかっていうと、口頭らしい。それで入所者をどうやって決めるのかもよく分からないんです。

—待機者リストができないですね、口頭だと。

平野さん：その園内ではあるんでしょうけども、だれがいつ入るか全然わからない、順番ではないですよ。うちの息子が入った時に、元の施設で日中のクラスが一緒だった方で、どうしてもやまゆり園に入りたいと、10年ぐらい前からショートステイをずっとしていた方がいらしたんです。その方ショートステイをするたびに、「ショートステイをしたからって、すぐに入れる訳ではありませんよ」って必ず（園に）言われてたらしいです。その方は、どうしても入れなかったのに、うちはもうすぐに…。

—申し込んでもいないのに？

平野さん：一年もしていないのに。で、どうしようかと思ったんですけどね、他に行き場もないし、その待ってた方に電話して、申し訳ないけど、うち先に行かせてもらいますって言いましたけど。うちは施設肯定派ではないのに、とりあえず施設に入っていますが、（ほかの）ほとんどの方は、施設肯定派というよりも、他のことあまり考えない、考えられないという方が多いと思います。

―やまゆり園の中では虐待は…

平野さん：うちのホームでは多分なかったと思いますね。

―そういう噂を聞かれたことはありますか。

平野さん：ありません。もっとも（ほかの家族との）横のつながりがほとんどないのでわかりません。やまゆり園では、日中活動でもいつでも見に来てくださいと、言うんですけども、まず、あの場所でしょ。行くのが大変だ。うちはそんなに遠くはないですけども、昼間一応仕事してますんで、そんなに行けないっていうのもありますし。また土日は園では特に何もしてないので、土日連れ出しに行くのですが、中の様子はそんなによくわからないし。一応、ホームの中には入れましたけどね。

（施設の様子は家族には）なかなか見えませんですね。（事件後に）他園に移った話をちょっとすると、8月になって、その時点で体育館に40人くらいと一緒に暮らしていました。他に居場所がないので。そこで寝泊まりして、写真で見ると、そこに布団を引いて、ついたてないような状態でした。

―避難所状態ですね。

平野さん：そうそう。雑魚寝に近い状態でそこにいたようです。うちの子は、夜寝るのが遅い

らしいんですよ。うろうろうろつきまわって、ピアノを触ったりして、どうも迷惑だ、みたいなことを言われて。最初の話では、建物を全部綺麗にしで住めるようになったら、すぐに戻れるみたいな話で、それまで他園へ移ってくれないかと。しょうがない、と思ったんですけども。一応県立施設で、指定管理だから、せいぜいやまゆりくらいのレベルはあるだろうと思って、承諾したんです。南の方の海の近くなんですが、行ってみるとすごい良い所なんですよ。すぐそばが海で海岸。ちょうど夏だったので、津久井のあの暗さからみたら、もう天国ですよ。なんてすばらしい、最初は出来れば津久井に戻らずここにずっといさせたいと思いましたよ。プールはあるし、児童の施設もあるので、結構広い。建物は古いですよ、50年くらい経ってるのですが、場所はいいので、ここなら良いんじゃないのと思った訳です。

土日は、（園の活動が）あんまりないだろうと思ったので、やっぱり連れ出しに行ったんですけども。当時旅行とか連れて行く計画もあったので、そういうことでも連れ出しに行ったのですが、当初本人はそんなに嫌そうじゃなかったんですよ、戻る時も、バイバイとか言って戻っていったし。そのうちよその園に移ったので、「やまゆりとの契約は切ってくれ」って言われて、「話が違う。戻りたい」って言ったんだけど、「今はいっぱいなんで戻れない、契約を切って、そちらと契約してくれ」と。もちろんやまゆりが戻れるようになったらすぐに戻るっていうのを一筆最後に入れるからと。だいぶ不安だったので、随分抵抗したんですけども。何とか戻れないのかと聞くと、戻れるかどうか、判断して電話するって言うんですよ。でも、それきり全然電話も来ない。

そのうち、9月の15日になってやっぱり契約してもらわないと困るって話になったので、契約するにしても、一度その園の中を見たことがないので見せてくれと言って、見学させて貰いました。

9月の15日に行って聞いたら、話が違うんですよね。散歩とかには行かないって言うんです。で、プールも使わない、あれは児童のものだから成人は使えない。外に出さないのかって聞いたら、少し慣れたら直ぐ隣にあるコンビニに買い物くらいは行けるかなと。その他出さないんですか、って言うと、いやー、その3寮、あそこは、いくつ寮あったのかな、7、8くらい寮があるのかな、やっぱり20人規模で。で、3寮っていうのは、身体の悪い人多いらしくて、今日生きるのが精一杯だ、って言うんですよ。だから、とっても外には出せないと言われてました。「うちの息子は若いんだし、外に出られないと困る。外に出るのが好きだし」って言ったら、「いや〜、あの、部屋ん中歩いてるから大丈夫ですよ。」って普通に言うんですよ。

一日中活動は？

平野さん：あるんですけども、そこに行くときに、外の廊下通っていますから、出てますよとか言うんですよ。何を言っているんだって思ったんですけど。やまゆり園に戻してくれて言っても、戻せないの一点張りだし。

(うちの子が)可哀想なんで、とにかく土日、祭日、全て連れ出しに行ってたんですね。で、10月の15日の土曜日だったんですけども、ぼくが一人で車で行って、そこから何とか、電車にも乗れるようになっていたので、電車に乗って、大きな公園行って、そこで散歩して、まだ時間がいっぱいあったのでご飯食べて、夜になって帰ろうかということで、電車に乗り最寄りの駅におりました。そこから15分くらいあるんです、園までは。それで歩いて行って、園が見える広い通りに出たら、もう行こうとしないんですね、がんとして。で、なんとか行かせようと思ったら、そこで、大パニックになっちゃって、持ってる物を投げる、他人の家に入って行こうとする。道路へ飛び出そうとする、用水路へ飛び込もうとする。仕方なくそのまま家

へ連れて帰りました。それから一週間ほど家で見ていましたが、やはり不穏になり、大暴れになって、手がつけられなくなってしまいました。それで何とかやまゆり園へ連れて行き、「どうにもならないので、預かってくれ」って。そこでやまゆりの職員に会ったら、ころっと機嫌がなおちゃって、一緒にさっさと行っちゃったんですよ。たぶん、二年も生活して居た場所で、知った顔の職員が居て、かなり安心したのだと思います。とにかく、移された施設では、知った顔が一人も居ない、まったく初めての場所、対応も悪い、考えれば無茶苦茶ですよ。よく2ヶ月も我慢したと思います。

やまゆり園に24日に戻したのですが、電話したら、預かるのは27日までしか無理だ、部屋がない、人がいない、絶対無理だって言うんです。無理だって言ったらうちが引き取るしかないし、移った園には戻せないし、どうしようと思ったのですが、今後どうするか会議を開くこととなり、市のケースワーカーや、移った園から支援部長も来て、話し合いました。しかし、やっぱり戻せないって言うんですよ。

「まず部屋がない」、「人がいない」(と言われ)、「部屋なんかなんとかなるだろう。会議室つぶしゃいいしどうにでもなる」、「いや、だめだ」って。「部屋を造るのにどれくらい時間がかかるんだ」って言ったら、「1か月かな」で、「1か月もとっても待てないし、むりだから今すぐなんとかしてくれ」って、最後にうちの妻が、もうキレて、怒鳴ったら、ようやく支援部長が、「じゃあ、なんとか相談します」っていうので。それで置いてきました。それからしばらく体育館で、職員が一人ついて寝泊まりしていたようです。なんとかなることは、なるんですよ。そのうち、体育館のおすぐ向かいにある部屋「みのりホーム」に居場所を作ってもらい、移りました。「みのりホーム」はけが人が出たけども、死者の出なかったところで、何とか使ってたんですよ。それと、犯人の全く行かなかった2ホームは使ってたんですけども。

あと、残りは七沢に、60人ぐらい移動してたのかな。だから、60人ぐらいやまゆり（園）に残っていた訳です。みのりホームというのは、自閉傾向の強い子が多いということは伝え聞いていたんです。さっき話した10年も待ってた方も、春に入園できてそこにいたんですけども、ほかにも前の施設の時からの知り合いの人いました。その、みのりホームというのは、大変な子が多いということで、保護者は中に入れてくれないんです。入ると他の子が、落ち着きがなくなるのでダメだって。また外にも連れてかないって言うんです。ひとり連れていくと他の子が落ち着かなくなるっていうんで。それで（うちの子を）毎週連れ出しには行っていました。

―そのぐらい自分の暮らしの場を、ある日奪われるっていうのは…

平野さん：うん。（やまゆり園に）戻せないっていうのは、組織の運営上のことなんですよ。利用者の事を一番にと、言いますけど、結局は組織の都合で動くのだからと思います。

―再生基本構想に関してどう思いますか？

平野さん：ご存知のように最初に知事が来た時にね、全面建て替えするって話をした訳です。えー、それは良かった、良かったって、家族会も良かったってことになってますよね。家族会で県に要望書を出しましたけど、実はその前にアンケートを取ったんです。どういうアンケートかっていいますと、家族会会長さんが作ってやった訳です。実は家族会といっても、ほとんどが会長一人で決めてるので。それがどういうアンケートかというと、建て替えに賛成ですか、それとも、今のところを綺麗にして使うのに賛成ですかという二者択一のアンケートだった。

―津久井やまゆり園を使うのが前提なわけですね。

平野さん：そう、そういうアンケートなんです。うちも一応、あの場所というなら建て替えるしかないだろうって思ったんです。それで、そのアンケートを基に、会長が要望書を作り、それを、県知事と議会に出したわけですね。あそここの場所で建て替えてくれと、それが希望であると、で、それがもう家族会の要望ということで、ずーっと一人歩きしちゃったんですね。

それで、県知事もそれを受けて、一応建て替えということをやったら、翌年1月の公聴会で大反対になったと。そこで、再生に関する部会を2月から始めることになって、保護者会の方は、話が違うとが言いだした。あそこに建て替えるのは、全面建て替えで130人分を作るのが、家族会の希望だって。家族会の要望書の根拠は最初のアンケート結果しかないんです。その後家族会で、何の話し合いもない。会長と役員は、ぼくも一応役員に入っていて、4人いるんですけども、ほとんど会長と園長で決めている状態です。

―役員会はあるのですか。

平野さん：あることはあるんです、保護者会の日の午前中に30分くらいあって。その後に評議委員会といって、各ユニットから、代表が出てやるのがあるんですけども。ほとんど、会長と副会長で決めてる。反対意見を言うのは、ぼくだけの状態なんです。

全面建て替えが、家族会の要望という事になってるんですけども。じゃ、他の方が、本当にそれを要望しているかどうかっていうのは、ほとんどの方、何にも意見を言わない。まあ、それはPTAなんかと同じで、要するに、言わないというか、言ってもしょうがないというのと、お世話になってるので、言えないというの、これは大きいですよ。子どもがお世話になっているので、逆らえないっていうか、反対ができない。それから、皆さんご高齢だということがもう一つありますね。

ー入っておられる方の？

平野さん：多くは、40、50代の利用者の親御さんですから、70、80の方が多いですね。後は、ご兄弟。ですから、あんまり、皆さん、こうしたい、ああしたいっていうのがない。というのと、もう一つは、今の世の中の福祉の状況とかそういうものをあまりご存じないようですね。

何故かという、もともと、やまゆり園は、終生保護施設として作られたわけですね。1960年に精神薄弱者福祉法ができて、神奈川県で最初のそういう施設を作ろうって、一生いられる場所としてあそこに造った。その当時は全国的に同じような施設が作られた。高崎の「のぞみの園」もそうですし、コロニーっていうものが創られた頃ですから、もうそこにずっと居る、障害者のユートピアとして作られたわけですね。

それで、ずーっと、その意識が続いているわけですね、それがあって、それ以外の事はもう考えられない。想像もしないし、これからどこかに移るなんて、とても考えられない。あるいは、障害のある人が一人で暮らす、そんなことは考えられない、というのと、親自体が、自分の子どもは、重度の障害者だと思い込んでるんですよね、大変だと。

それは、大変だったんでしょう、実際うちも大変だったです。大暴れして大変だったんですから。そういうこともあって、簡単に言っちゃうと、親が子どもを障害者だ、として見ちゃってるんですよね。人であるという前に。それは大きいですよ。障害者としてしか見てこなかったわけですから、今まで、それで苦労してきたわけだから、障害者だから、なんとかしなきゃいけない、障害者だから、施設に入れなきゃいけない、障害者だから、色々ヘルプしてもらわなきゃいけない、と思う。親はそう、思い込んでいますから。

極端に言えばですよ、人としては見る事ができない…、だと思えますよ、多くの方は。仕

方がないと思っちゃうんですよね、障害だから、何かできなくても仕方がない、外に行けなくても仕方がない、ここにずっといても、仕方がない。あるいは、逆に言えば、ここにいる事が一番いい、それ以外は考えられないってことなんですよ。

ーじゃ、平野さんはどう思われますか？ね、だからこそ…。

平野さん：それはね、だから、ちょっと違うだろうと。ぼくも、もちろん最初の頃はそう思ってたかもしれないですよ。大変だったですからね、そりゃ皆さん大変な思いしてるわけですよ。もう、家の中もぐちゃぐちゃ、もう、うちなんかまだいい方で、例えば、もうとんでもない子がいっぱいいるわけですよ、家のガラスを全部割ったとか、人んちの車に飛び乗ってべこべこにしたとか、そんな方いくらでもいるわけですね。

あるいは、包丁持ちだして大暴れするとか、そんな子いっぱいいるわけですよ、みんなもう死ぬような思いをしてきたのは確かなんです。だからそこから抜けられないんですよね。それはもうしょうがない部分はあるんだけど、向こうの立場からみれば、酷い話ですよ。勝手にこんなところに閉じ込めて、何にもできないと、やりたいこともできない。

ー「向こう」とは障害のある方お一人お一人のことですか。

平野さん：そうです。行きたいところにも行けないし、おいしいものも食べられない、毎日同じもの、みんなで食べさせられて。毎日3時ですよ、風呂入るの。パジャマに着替えさせられて、どこにも行けない。好きでもないテレビ見てるだけ…。

実際20人で、職員は3人くらいですね、極端に言えば、見てるだけですよ、出来ないで

すもん、だってひとりの人に関わってられない。なんとか見てる、悪く言えば監視員ですよ。職員の方は、いろいろやりたいと思っていても、できないですよ。3対20でやりたいことやらせてやろうと思ってても出来ないと思います。

だから、前の施設で「良き羊飼いになるのが一番いいんだ」って言ってた職員がいますよ。それが現状ですよ。利用者もそこでうろろろしてるしかないわけです。

普通の人にそんなことしたら、監禁、虐待ですよ。相当ギャップがあるわけですよ。施設も、人がいないんだから仕方がないよということなのか。どうにもならないですよ。人がいればなんとか、一人ひとり見られるかもしれないけれども、実際どうにもならない。

親御さんもそれで、致し方ないというのと、世の中の例えば、外へ出て、もっと自由な暮らしをしてる人の事はよく分からない。うちの子は重度だから、とってもそんなことはできないだろうと思ってる、あるいは年だからできない、と思ってる方がほとんどです。

後は、もう面倒なことに関わり合いたくないっていうのも、あるかもしれないです。会いに来ない方もいらっしゃるわけですよ。おおげさにいえば、もう捨てちゃってると、子どもを。そういう方は、今まで何人も見てきましたし、実は前の施設の同じクラスの方で、朝起きたら亡くなっていた方がいるんですよ。裸になって死んでたって方。それは虐待じゃないんですけど、その親御さんが、絶対にそういう子がいる事を、知られたくないと。その子は一人っ子の方だったんですけど、奥さんのお母さんが、障害者の施設とかできることに大反対してる方らしくてね。そういうこともあって、自分の家にそういう子がいることは絶対に知られたくないって。亡くなった時も、一切お別れとかそういう事しないでくれと、こそこそと来て、衣服、服とかも、みんな処分してくれて、そのまま帰られたそうですけども。そういう方も結構いるんです。それから、まったく会

いに来ない方もいて。その子は18、で年金をもらえるとし…

一年金は二十歳ですね。

平野さん：失礼、二十歳になった時に、年金を貰えることになって初めて来たって方もいましたけど。亡くなって、氏名を公表しないでくれ、っていうのも、そういうところからきてるかもしれません。利用者の方たちをそういう風に、閉じ込めておくってことは、逆に言えば、ああいう事件を引き起こしたということに繋がる、突き詰めていけばそうなると思うんだけど。実をいうと、そのことに関して、共同会ではあまり考えてないようです。

一（事件が）起こったこともですか。

平野さん：うん。だから施設にそういう問題があったということは、一切言わないですよ。考えてないですよ。ああいう人が出てきたって事は、施設にも問題があると思うんですが。

そりゃ全てでは無いにしても、根にはあるわけですよ。それは多くの方が指摘してると思うんだけど。そういうことは一切言わないですよ。要するに、あの犯人1人が悪いと。それが全てだというスタンスだと思うんですね。

それが全てで、施設も被害者だと。よく園長など事件の話をすると泣いちゃう訳ですね。いい加減にしてくれとぼくは思うんですけど、家族会の会長なんかかも同じなんです。自分たちは被害者だと、そっとしておいてくれと。多くの家族の方も同じだと思います。憎いのは犯人であって、施設のありようとか、障害がある人に対するアプローチの仕方とか、そういうものには一切、触れたくはないというのが本音なのかな。だから、部会で、（これから）地域へ出すとか、そういうことを、一切触れられたくないわけですよ。そっとしといてくれと。ここでなんか蒸し返して、どうのこうというのはもう

嫌だというのが本音だと思います。多くの方はね。

—平野さんはどうですか。

平野さん：うちはもう、とっとと出ていこうと思って。今月の末から（地域移行の）体験に行くことが決まっています。

もう一つは意思決定支援会議を、9月からやるって言っていたんですけど、進まなくて。一部では始まっているって話ですけども、うちもおととい連絡あって、これから始めるっていうの。（略）

まず、13人をピックアップして、意思決定支援会議のモデルケースを作りたいらしいんですね、県としては。どういう人が選ばれたかわからないですけども、それを始めるんだという話です。構想自体に関しては、反対だなんだありますけども、皆さんあんまりよく解らない。地域移行って、どういうことなのかわからないし。保護者は、施設に対して不満も持っていないですし…。そういうところが普通なのかな、だから問題意識が無いですよ、全く。多くの方は何でそんな大騒ぎするのっていうし、（異を唱える人が）何を言ってるんだか全然理解できない。

—情報の不足はありますか？

平野さん：うん。共同会にも言ってるんですけど、共同会がそういう事を一切知らせようとしないのも悪いし、家族会も、何やってるんだかわかんない。そういう事は知らせてくれるっていう事は言うんですけど、そういう機会がない。さっき言ったように保護者会が、月一回もないので。

—行事ごとに集まるとかっていうのは…

平野さん：ないです。だから全員で話すことは

殆どできないですからね。例え集まっても、あまり話すことはないし、（保護者は）お年寄りが多いので。言っちゃ悪いですけどね、話が通じない。とんちんかんになっちゃうんですよ。年寄りばかりでしょうがねえよっていうと、あんたも年寄りよって言われますけど（笑）。でも本当に、あそこではぼくなんか若手のほうですから。

—逆に言うと、地域移行って言われても、受け止める力は、多くの家族にはもうない…

平野さん：いや。それを家族に求めたら、まず上手いかないんですね。やっぱりそういう事は、（家族に）一切負担をかけないと知事も言いましたが、それは家族が不安になっちゃうので。そのことは、県にだいたい要望はしてますけどね。大勢いるところで家族に話をしても通じないんですよ。だから、意思決定確認をする段階で、家族にも丁寧に説明するという方法が一番いいんじゃないかと思います。

—ご本人の意思決定とかいっても、事実上それはご家族自体もセットでない？

平野さん：そうです。

—ご本人に、どれを選びますかといっても殆ど意味がない？ どの程度時間をかけられるか、よっぽど丁寧にやらないと。

平野さん：多くの親御さんは、うちの子なんかは意思がないからと、無理だって…

—ごめんなさい、先ほどのあれは言い過ぎでした。

平野さん：いいえ、いいんです。施設でも、そう思ってる方多いんですけど、そんなことはなくて。（略）どんな人でも、意思はあるんですね。

脳のない子、小脳しか機能しない子がいて、そういう子でも、意思があるっていうんですね。それは何が意味かという、生きてるってことが意味だ。生きようとしてることが、呼吸をするということが意味なわけで、誰にでもあるわけです。先日、うちの子は初めて選挙に行きました。当然うちの子は、何が何だか解らない、字も読めないし、それでもやっぱり、そういう事させるということは必要だと思ったので、やらせてみたんですけども。選びますよ、一応。

一選択肢をよっぽど丁寧に提供しない限り、難しい。あなたどこ住みたいですかの質問自体、あまり意味がないということを書いたかったんですけどね。

平野さん：うん。やりようはあるし、やってみなきゃわからない部分もあるので、例えばそういう体験をさせるとか、そういう事をやりながら、すぐにその場合決めるんじゃなくて、ゆっくり決めていくという方法でいいと思うんです。そういう方法を持って少しずつ進めていけば、何かしらの結果は出るし、家族に関しても丁寧に情報を与えていけば、それではちょっとやってみようかという方もかなり出てくると思うんです。例えば、北海道の「はるにれ」もそうだし。そういう事やってきて実証済みなので、かなり進んでいくと思いますよ。

一問題は地域移行の受け皿自体ですか。

平野さん：それはね、すぐにはできないですよ、すぐにはできけれども、ゆっくりやってけばいいわけで。百何十人を一挙に移すなんということとは到底無理なので、少しずつ移していく中で、残った方は、とりあえず津久井と、芹が谷にいて、またそこから少しずつ出していくと、いうことになるんだと思うんですね。

それが多分、本来のこの構想の根本にあるもので、この構想で一番最後に付け足されたのは、

130 人の住まいは必ず、受け皿を用意するっていう。本当は付けたくなかったと思うんですけど、最後にしょうがないから付けた。もっとも、家族会会長なんかはそれを盾に、未だに、津久井に 80 人くらいのもをつくらうと思ってるみたいなんですけど。

そんなのはもう、全くナンセンスなんです。造るにしても、そこから少しずつ移してく。そういう事をやっても、戻ってくる人もいますよ。（国立）のぞみの園でもまだいるわけで。やった結果なら仕方がないですけど、なんにもしないでまた施設へっていうのは、可哀想すぎますよね。

一津久井やまゆり園定員の 80 人は多すぎる？

平野さん：うん。3 年も経てば、どんどん地域へ出ていくと思いますよ。地域に積極的な事業所もありますし、新規でグループホームを一軒今作ってますから。（他の事業所も）相模原に造ろうとしていますので、どんどん増えていくと思いますよ、5 年もすればかなり増えると思いますけどね。

一やまゆり園が受け皿になっても、そんなに大きな規模で残らないですか。

平野さん：残らないと思いますよ。あまりいい話ではないですが、ある方によると、施設では、統計上、毎年 5 人は亡くなってるって言いますが、それでいくと 5 年もすると、20 人になってしまう。実をいうとやまゆり園の中に、重度の方が多いと考えててらっしゃると思いますが、本当に重度の方はいないと思います。最重度の方が、4 人か 5 人くらいじゃないかと思います。

一寝たきり状態の人は？

平野さん：殆どいないと思います。重心（施設）

については、相模療育園っていうのがありますけども、(やまゆり園には) そんな人はいないんじゃないでしょうか。ぼくが知っている限りでは、胃ろうの方が一人、医療が必要な方が一人いますけど。本当、最重度のかたは、4名って言ってましたね。ほとんどの方はね、今すぐにでも移れるような方ばかりだと思います。

—今、重度の人たちはどうしているのですか。

平野さん：それはね、こういう施設っていうのは、最重度の方は取らないんだと思います。みるスキルが無いからというか、人手がかかりすぎるから。

—そもそも、やまゆり園が、最重度の人を入所させてなかったって意味ですか。

平野さん：(入所) させてないと思います。お金は取れますけど、大変で人手がかかっちゃうから。最重度といっても、手のかからない人だと思います。区分が6で、手のかからない方が一番いいわけですが、施設としては。だから、申し込み順に取らないんですよ。選別するんだと思います。だから大暴れするような子は殆どいないんです。それで逆にうちの子なんかたまに大暴れしたりすると、大変だって言われちゃう。

—報道では、なぜこんな重度障害の人たちの施設と言われたのでしょうか。

平野さん：それは会長とかが、そういう風にいるからです。園長とかもそうです。家族会の中にも、自分の子は重度と思っている人がいっぱいいるわけです。なぜかっていうと、他の子見たことないから、そんな重度の。だって自分の子しか見たことないんですもん。自分は大変。うちだって大変ですよ、それこそ大暴れしたら、とっても手に負えないし。みんなそう思ってる

んですよ。

実はうちの妻は、ヘルパーやってるんですよ。行動援護と、移動支援と、ショートステイで、在宅の方が多いんですよ。うちに帰ってくるたびに言うのは、うちの子の方が楽よねって。在宅でみてる子の方がはるかに大変な子がいっぱいいますよ。

やまゆり園では実際、本当にはよくは知らないですよ、ぼくだってその子と一緒に暮らしたことある訳じゃないし。ただ、みてる限り、みんな穏やかですよ。本当すぐにでも、外に出してあげられそうな方ばかり。

—ああ、そこのイメージが、間違えていました。

平野さん：そういう最重度の子をみるようなスキルはないですよ。(略) そんな最重度の子は、やまゆりの場合はいないですよ、実際。そりゃ、確かに、うちの子みたいに、上手くケアしないと、ひどいことになっちゃう可能性はありますけど。普通にちゃんとやれば、なんの問題もないと思いますけどね。

—住む場所、だけじゃなくて、息子さんの場合だと…

平野さん：人、

一人ですよ。地域移行といった時は、グループホームっていう場所だけでなく、安心できる人が、そちらに職員に移ったりできることが大事ですか。

平野さん：そうです。だから、そういう事を、あの、共同会がやってけば良いんですけどね。だから、津久井と芹が谷の2つに分かれて、この子を(地域に) 移そうって時に職員が、一緒についてしばらく行くというようなシステムが、ちゃんと出来てくれば。

—これまでの職員が、施設職員じゃなくて、グループホームの世話人として、仕事をされるとかっていう発想の転換なんかも必要なんですね。

平野さん：そうそう。「こげら」って有名なところだから、ご存じかもしれないんですけど、行動支援と移動支援やってるところで、職員がそのままグループホームに行く。知ってる顔がいるのは全然ちがいますから。そういうシステムが上手くできてくれば、大変なことにはならないと思いますよね。だからそういうのは、「はるにれ」なんかでもそういう風にしてると思うんですよ。あそこが優れてるのは、サテライトって言って、ダメだった時に、バックアップ施設がある。そのような施設として、津久井なり、芹が谷なりに造っていければ、かなり上手くいくと思うんですけどね。

—再生構想でも一応言われていますね。割と、柔軟に対応できるようにと。

平野さん：県がどこまで本気でやるか。このあいだも知事が説明来た時に、念押しはしたんですけども。実をいうと、10年前に、神奈川で、グランドデザインっていうのをつくったのがあるんですけど。

地域移行させていこうという、大々的にやっただけですけど、いつの間にか尻すぼみになっちゃって。全然そんなのどこいったんだか分かんなくなっちゃったような経緯があるんで、そういう風にならないようにってかなり強く言ったんですけどね。(略)

あとは県の職員ですよ。局長なんかも、かなり前向きなようなので大丈夫だとおもいますが、問題は、相模原市。昔からなんですけど、あんまり、前向きじゃないですよ。やまゆり園は県立施設なので、もともと相模原市じゃないんですよ。今は相模原市緑区ですが、元は津久井郡。

—あの場所ですか。

平野さん：ええ、津久井はもともと相模原市じゃないので。相模原市は、あそこは県の施設なんで知らないよ、ってスタンスだったみたいですよ、昔から。あんまり積極的じゃないっていうのがあるようですね。

—造るとしたら、相模原市内に造ることになりますよね。

平野さん：まあ、そうですね。相模原に限定したものではありませんけど。だから、言われれば、国から、あるいは県から言われればやるよみたいな。今んとこそういう感じなんですよ。

県央福祉会というのは、昔から施設をもたずにグループホームをやっているところですが、グループホームを十か所以上相模原に作っているんです。ただ、相模原の施設の協議会なんかからあんまり好かれてないようなこと言ってましたけど。相模原にはほかにも福祉村っていうのがある。あるんですけど、そこはうんともすんとも言わないですよ。

—（地域移行の際に）手を挙げないんですか。

平野さん：挙げないんです。なんだかよくわかんないんです。何かあるみたいですね。

—グループホームにするとしたら、市町村、市が、障害者福祉で、色んな支援をするっていう、費用負担が、市に移るんですかね。

平野さん：そうですね。相模原はそういうグループホームに関しては、お金を出してはいるようです。進めやすいはずなんですけど。(略)

—最後によいですか。平野さんが、私たちに問題提起することは？

平野さん：一番根底にあるのは、やっぱり人権問題ですよね。皆さんおわかりだと思いますけども。最終的にはこの国の文化の問題になっちゃう。この国の近代から、問い直さないといけない。そうなるとなにをどうしたら良いのか、全く見えなくなってしまうんですが。

逆にね、そうしたらもう1回立ち戻って。身近なところから進めて、例えば、うちの子を外に出すという事に執着してやっていくしかないんじゃないかと思いますよね。それが、少しでも刺激になれば、半歩でも、数歩でも、進むことになるだろうし。

色んな人たちがいますよね、例えば、一つの運動として、進めてかないといけないというスタンスの人もいるでしょうし。それはそれで良いし。議員に働きかけていかなきゃいけないって人もいるだろうし。もっと大規模な運動をしなければいけないと思ってる人もいるだろうし。ただ、そんなに一気に変わることはありえないので。根底にあるのは文化の問題ですから。そんな10年20年で変わる事じゃないですからね。100年単位で変われることないような話なんで。

—今日の話でも、施設のあり方が問われるんだって言われていましたね。だけど、県はそれをきちんと考えていなかった、考えなければいけないとも言われていましたね。

平野さん：そうそう。単純に地域移行、地域移行って言ったって、何のことかわかんなくなっちゃう。今の流れとしては、例えば、障害者虐待防止法とか、人権問題とか、一応法的にはかなり整備されつつあることはありますよね。ただ、世の中の動きとしては、どうもあんまり芳しくない方向に行ってるかも知れないけど。

それでも、なんかしら身近なことを進めていければ、少しでもどうにかなるんじゃないかと思いますけどね。実際、うちは3年前に、できればグループホームに行かせてみたいと思い

ましたけど、当時ほとんどなかったですからね。それがこの3年でどれだけ進んだかってって事考えるとびっくりしますよね。今だったら、グループホームあちこちに出来てて、いくらでも見学に行けて。そういうことを考えれば、これから、3年4年たてば、もう、かなり変わるんじゃないかと思うんですよね。ただ、なんにもしなければ、なんにも変わらないんですけどね。

—そうですね。そのためにも平野さんにご発言していただいていますし、私たちも私たちにりに発言していく必要があるということですね。

平野さん：そうそう。県が腰砕けになるんじゃないかっていうのは、周りが音沙汰無ければそうなっちゃいますよ。だからあらゆる立場の人が、あらゆるところでそういう発言して、押上げていってもらわないと。人は一人じゃ何にもできないですからですからね、何にも変わらないですから。それはもうどんな形でもいいから、そういう事は進めていって欲しいですよね。それで少しずつ周りの意識も変わってくるだろうと思います。

—最後によいですか。やまゆり園が第三者評価を平成22年に受けていて、その中に「利用者自治会も活動している」という記述がありますが、利用者自治会の実態はどうなっていますか？

平野さん：ああ、ありますよ。あの、ピザの会っていうのがありますが、何をやっているのかほとんど知りません。(略)

—息子さんご自身も利用者自治会活動には参加しているはず？。

平野さん：ピザは食べてるかもしれないですね。なんだかよくわかんないです。今までも、利用

者の意思確認をしっかりとやって、物事を進めますとかって、どこでも言いますよ。言いますけど、できてはいないんです。できないんですよ、だって人はいないですし、やり方も分からないし、そんなことやってる暇もないし。

一応、個別支援計画ていうの、ちょこちょこつとやりますけど、それだって、説明が1時間くらいですよ。ちょこつと話をして、こうですか、ぐらいですから。第三者評価にしても、息子が一時移っていた園なんかも優ですよ、最優秀みたいな。びっくりしちゃいます。議員視察なんかだって、素晴らしいっていう報告しかないですからね。

外から見ただけでは、わからないんです。実際に体験してみないと。だからね、新聞記者だって、全然何にも知りませんよ。あなた方一回3か月くらい入ってみたらって言ってんですけどね。園に話を聞いたとしても、悪いことなんて一切言わないですもの。言うわけじゃないじゃないですか。というより、素晴らしいことをやっていると、自ら思い込んでいるんですよ。確かに悪い人はいないんです。福祉をやってる人、みんな悪意は一切ないんです。みんな善意でやってるんです。

—それは難儀ですねえ。

平野さん：だから手に負えない。悪意あるものはね、どうにでも糾弾できますけどね。善意でやってることにに対しては本当に手が付けられない。

—今日の平野さんのお話で、事件はきっかけだったけれども、もっと構造的で、やまゆり園のだけの問題じゃないことがクリアになりました。福祉が善意で運営されているがそれに伴う仕組みが作られてない。ご家族の立場からからは、そのしわ寄せがご家族は言っているが、それが解っていても言えないっていうのがまた、事態が深刻なことですね。

*聞き取り調査実施については、首都大学東京研究安全倫理委員会の承認を得ている。

また、本内容を本誌に掲載することについては、事前に平野氏による内容確認・承諾を得ている。